

小杉本『別習鷺流狂言本』翻刻・解説：鷺流稀曲考

著者	田口 和夫
雑誌名	能楽研究：能楽研究所紀要
巻	15
ページ	135-178
発行年	1990-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020417

小杉本『別習鷺流狂言本』翻刻・解説

—— 鷺流稀曲考 ——

田 口 和 夫

前号で予告した、小杉忠三郎旧蔵中村保雄氏現蔵『別習鷺流狂言本』を翻刻し、解説を加え、鷺流の稀曲について考える。

〔翻 刻〕

凡 例

一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、左の方針に従って校訂した。

1、文字づかいは底本通りとし、混用している片仮名もそのまま生かしたが、漢字の異体字や旧字体は、「哥」など若干

のものを除いて、通行の字体や新字体に改めた。

2、濁点・半濁点・句読点を加えた。濁点は底本に付けられていたものと区別しない。底本に付けられていた句読点は「。」、校訂者が補ったものは「、」によって示した。

3、傍線によってミセケチして、右に訂正を加えたものは、ミセケチ部分を本文に残して傍線を施し、訂正を「」でくくってその後に置いた。また○によるミセケチ、ミセケチの印のない訂正は、その位置のままとした。

4、行間の補筆や演出はへでくくって相当の場所へ置いたが、謡物の注は行間のままとした。

5、振仮名は、そのまま生かした。

6、校訂者の注記は（ ）でくくった。

7、各曲の冒頭に番号を付した。

別習驚流狂言本（表紙題簽）

（目録）

- | | | |
|-----------|-----------|----------|
| (1) 雪打合 | (2) 蛛盗人 | (3) 指 鶯 |
| (4) 松囃子 | (5) 花 戦 | (6) 昆布布施 |
| (7) 連 雀 | (8) 菌山伏 | (9) 酒盃拜 |
| (10) 伊勢物語 | (11) 二九十八 | (12) 鈍言草 |
| (13) 姫 糊 | (14) 斉布施 | (15) 狸 壳 |

(1) 雪打合

一ノアド是ハ此隣に住居致す者で御坐る。此節ハ毎もとハ申ながら。夜前ハ殊の外なる大雪が降りつもりたれば。かよひ道をはき分けふと存じ罷出た。左有^サバはきませう。扱もくつめ度事かな。是ハく某のひさうの柿の木藪の竹が雪でおれそふな、かち落そふよ。ほうつめたひハく。二ノアド罷出たる者ハ「是ハ」此所に住者で御坐る。夜前ハおびた敷雪がふりて通り道が知れぬ。雪まろこかしにして、道をあけふ。扱もく降たりく。毎もとハ申ながら、当年ハ雪年そふに御坐るよ。いや何右衛門殿出られたよ。何とく是ハ殊の外ふりつもつたの一ノアドいや其方も雪をはきにお出やつたか。なふくつめたひ

事でおじやるよ。二ノアドいや是ハ其様に此方へはきおこさず共。面この軒下へはきあつみやれよ。一ノアド此方の雪ハ其方へはきやる程に。其方ハ又隣りの方へはきやらしませよ。二ノアドいやく。是夫ハりふじんな事じや。昔より雪をはく法がある、其様にハさせぬぞ。一ノアドやあら其方ハあらたまつた事をいふ。次第くにはき遣るに、誰が何と云者があるふ。其上雪をはく法とハいかやうな事ぞ、少ト聞とふおじやるよ。二ノアドされバ雪ハ銘この海道のをはきあつめて。夫をまろめて我家の軒下に置こそむかしよりの法でおりやるよ。一ノアド其様なつめたひ事ハ某ハ多せぬ程に。其方式法の通りに丸めて其方の軒下におかしませ。二ノアド是ハ其方ハ某に雪をはきかけるな。一ノアド其方にかけうと思ふて掛ハせぬが。少し又かつたらバよひハさて二ノアドいや人に雪を掛けてよくハ其方にもかけてやらふぞ。一ノアドニテハキカクル、二ノアドハ鉄にテカケル、此間ニシテ出ル。シテ是ハ此隣に住居致す出家で御坐る。今朝ハ旦那方へ齊に参る約束致たれ共。夜前大雪が降りまして、早朝より参り兼只今罷出た。先急で参ふ。誠に世に有徳な方ハ哥を讀詩を作り、雪をちやうあいなさるれ共。我等鉢のひん僧ハ齊非時に参るに、雪がふれバ難儀に存るよ。いや是ハく何事を召さるゝ、先までく。何とて是ハりようじなる事を召さる。一ノアド是ハ能所へ御坐つた。先聞て下されい。殊の

外の大雪じやに依て。海道の雪をはき分に出ておじやれば。あの者が海道（き）の雪を此方へはきこすに依て。名この軒下にはきあつめておけといへば。あまつさへ某に雪をはきかくるに依て。

只今の通りじや聞分て下され シテ是ハあの者がわるひ。愚僧が異見の致そふ、先おまちやれ。やあら其方ハりふじんな事を召さるゝ。むかしより雪ハ面々の軒下にはき集置が法じやに。

其方ハ我がまゝといふ者でおりやるぞ 一ノアドいやゝそふでハおりなひ。此方の雪をあのほうへはきやらバ。又其となりへはきやつて。次第ゝにはきやれといへ共聞分ずして、あまつさへ某に雪をはきかくるに依て。只今の通で御坐る。あれがむりで御坐るぞ シテ扱ハ次第ゝにはきおくれじや迄。是ハ其方がいう通じや。あの者がわるひ、愚僧が異見のせう。是ハ其方のわるひハ、あの者がいふ通りに次第ゝにはきおくれバ、何の申分もなひ。是ハ其方が我がまゝといふものじや 二ノアドいやゝそふでなひ。昔より法がお坐る、我が家の前な雪ハ丸めて、我が軒下に置法の事で御坐る シテいか様にも其方が云道りじや、愚僧が異見の致そふ。是ハ其方がいう通、次第ゝにはきやりたい物なれ共、はきやるもまろめるも同じ事なれば、法まかせで丸めておきやれの 一ノアド思ふても見させられ、此大雪がそもやゝつめとふて、丸めらるゝ物で御坐らふか。次

第ゝにはきおくるに。誰が何と申者が御坐らふぞ。某ハいやでもおふでもはりやり（き）まするぞ シテいかにも是ハつめたふて。

そもやゝ丸められハせまひ。是ハ次第おくりにはいたがまし、はきやれゝ。なふゝ其方ものはきやらしませゝ 二ノアドや

あら御坊ハ某が申を聞分て、尤そふに合点のして居て。あのりふじんな者のひいきをして。はきやれゝとかたうど召さるゝ

ハ。夫ハ御坊にハ似合ぬ事でおじやるよ シテはて次第ゝに

あの者がはきやらバ。又其方もとなりの方へ次第ゝにはきやらしませ。はきやれゝ、此つめ度にそもやゝ此雪が丸めら

るゝ物か 二ノアドむう夫ゝ其はづじや。御坊のあの者がひいきするはづ。夫ゝ思ひ出した、ゑふよしなひ者共と雪論をした。

夫ゝ其筈が有もの シテいや其方ハ何とやらん面白物のいう様召さる、あの者がひいきとてハ何も致さぬよ。其筈とハどうし

た事じや 二ノアド其筈がある、爰でいふたらバ御坊にはぢをあ

たゆる。あの者が居るに依て申ハせぬ 一ノアドやあら某が爰に居ればとて、御坊のはぢな事があらふ。聞て居ればいゝたひま

ゝな事をいふ。おのれがよふな者にハ、雪をはしましたがよひ

るぞ。童が子がけんくわをして。雪打合をして居る。是ハゝ

雪ヲ丸メテ
イクツモ打当ル

二ノアドいやおのれハすいさんなやつ
雪ヲ丸メテ
イクツモ打当ル

シテ是ゝあていゝ
雪ヲ丸メテ
イクツモ打当ル

女なふゝ、何とおしや

あたりの衆、夫とり分て下され。是は御坊様へ爰に居ながら、見て居しますか。なまぬかつた。常こいといひのかわひゝのと、誰が事でおしやるぞ。童が事ではないか。シテやいゝ人が聞へ、だまれ。女ノ口ヘ手ヲ扱にがゝ敷事かな。女其方と童が事、誰がしらぬ者があらふぞ。シテまたいふか。女ノ口ヘ手ヲ夫ハ内証の事じや、爰でいふ物か。扱とおぬしハだまれといふに。先雪をあていやひゝ。二ノアド人のいうを誠かせつかと思ふたれば、是ハおかしい事じや笑有り。三人やれあていゝ。二ノアドおのれは大勢して雪を打共、まけハせまひぞ。此間雪打合スルナリ。難法大勢して雪を打とて、夫そこな御坊とハめうとよゝゝ、こめうとじやハ。三人やるまひぞ。ライコミ也。

(2) 蛛盗人 名乗座ニテ名ノル

シテ罷出たる者ハ「是は」此隣に住者で御坐る。此中若き衆と初心講を結で御坐るが。当月ハ某の当番で御坐る。何れもの方へ参れば、色々馳走をなさるれ共。某ハ手前物事不調に御坐れば、何とも迷惑致す。併何れもの方へハ参り手前の当を勤まひと申事もならぬに依て。とほつおいつ思案の致すに、何右衛門殿と申御方ハ、有徳な人で御坐る程に、此方へ今宵忍び入て、何成共断なしにかりて参り、夫を代なして、各々同前に当を勤

ませうと存て罷出た。ト云右ヨリ左リへ先そろりゝと参らふ。手前不自由なれば、あられぬ思案の出る事で御坐る。去ながら、又仕合を致て御坐らば、貰^(買)戻してかへすれば、別に料^(科)にハなるまひ。二ノ松ニ立留りゝいや何角申内にはじや。中々表ハ用心がよひに依て、はいられそうにハなひ。小廻リ裏へ廻り様子を見ませう。定てうらハか様にハ有まい、先裏へまわるふ。何^(卒)率首尾よふしすまし度事じやが。去バこそ申さぬ事か。表とハ違ふて、又裏道ハ左程にハ見へぬよ。先此よし垣さへ越たらバ、忍び入つたものじやが、是を何とぞしてやぶり度事じやが。ゑい致様が有る、ずるゝゝぐわつさり、先内に誰か聞ぬと見へて人音ハせぬぞ。さらバはいりませう。いやゑい。先はいつたが。はあいかふ胸がふるうぞ、なんのその是程にして、其まゝ帰る所でハ有まい。此あま戸を明けて坐敷^(座)へは入て、何成とも手に当る物を幸に、かつて行ふ。さらゝゝアドいや裏の座敷の戸のあく音が致た、不思議な事じや迄、やれ盗人よ、皆の者共出合のがす事でハなひぞ。愛デシテニゲマハリ、大臣柱ノ方ニテ蛛ノスニ掛リタル体シテ居ル。是ハどこへにげたぞ、扱々口惜い、只一打に致そうと思ふたに、但し坪の内なる植込にかごふてかな居る物であらふ、さがし出さう、其様に外へにげ行足音ハせなんだが、植込にかがふでおらふ、いや是に居るに、己ハにくいやつ、よふはいりお

つたよ、只一打にしてくりやうぞ シテあゝ是こはやまらせられな、盗人でハ御座らぬぞ アド己人の内へ夜更て忍び入ッて、盗人でないとハにくるやつめが、只一打にせう シテあゝ先ものをいわせ、此様に蛛の巢に掛りて迷惑致す^(マヤ)、居るものを、一打にせうとハ夫ハ余りつれない事よ アド何じや蛛の巢に掛つて迷惑する、やあゝ誠にはハ蛛の巢に掛りて居るハ笑有 蚊やはいの様に、大きななりをして蛛の巢に掛ッて、もたゝしてあのならハ笑有 シテいや是こ其様に笑わせられな、馬さへ蛛の家^ヌに掛るためしが有るもの、人じやと有りて掛るまひものでハ御座らぬぞ アド何じや、馬さへ蛛の家^ヌに掛るといふかシテ中／＼古哥にも御座るよ アド何とある シテ蛛の家^ヌにあれたる駒ハつなぐ共二道掛る人ハたのまじとあれば、むかしハ蛛の家^ヌに馬もつなされた、今人の蛛の家^ヌに掛たればとて、おかしい事ハあるまひぞ アドやあら盗人にハやさしい事じや、古哥を覚えて申、是ハゆるそふ。やいゝ今一打にせうずれども。盗人にハやさしい古哥を引た、某是に付て上の句をよもふ程に、汝下の句をつけ、さもあらバ命をたすくるぞ シテ夫ハ忝ふ御座る、去ながら左様な事ハ、申たる事が御座ない、只其俣助て下されませ アドいやゝ汝ハやさしい者なれば、なるであらふ、号もあらふか シテ何とて御座ります アド蛛の家^ヌに掛るふしぎ

の盗人を シテきるもきられずさゝがにの糸 アド是ハ一段と出来た、助る程に、いざ出て帰れ シテ近比忝ふ御座る、何共手も足もすにまとわれてはなれませぬ、此すをきりはらふて下されませ アド心得た。そりやゝよいか。さあゝ出て帰れ／＼ シテあいたゝ。腰の骨がたがうたよ アド何としたゝ。いやわごりよか。是ハ／＼其方とハ知らなんだ シテ扱も／＼面ばくも御座らぬ、沙汰なしにして下されませ アド其方とハ勝て知らなんだ。扱こさむからふ、一ツのふでお行やれ シテ夫ハ忝ふ御座る、重て参りて下されませう、只帰りませう アド是こ先お待やれ、是悲^(マヤ)ともでおじやる、是こ一ツお吞やれ シテ是ハ近比忝ふ御座る アド扱是を其方へおまするぞ シテ御酒さへで御座るに、是ハ御しんしやく申ませう アド平にとらしませ。重てもしお里やるならば、表から案内で御尋に預らふ。此様に召るれば、某も肝を潰す、必らず夜更てからハ御無用でお里やるぞ シテ何が扱、参る事でハ御座りませぬ。少も御氣遣ひ成されますヘルな アド某ハ休む程に早ふお帰られ シテ心得ました。是ハ／＼存じよらぬ仕合じや。命ハ助る、お酒ハ下さるゝ。此様な目出度折ハ、和哥を上て帰らふ。和哥上実や和哥の言の葉に。たけき鬼神も納受とハ。か様の事や申らん、夫一定や誠や。／＼。一ト木の影に隠しに。大きな蛛の家^ヌに掛り

あらはれしを。某が古哥を引しいとくにて。其とがをゆるされ。御酒一ツ給わり。御着とて此小袖。きるもきられず言の葉の。盗人におひすると。いふこそ不思議成りけり。く。(以下コトバ)やあら嬉しや、急で帰らふ

(3) 指鶯

アド是ハ此隣に住む者で御座る。某小鳥をすひてかひまするが。此中去方へ参りたれば、よき鶯を持て居られたに依て。所望致すれ共、何角申て呉ませぬに依て。此中又便をもつて申にハ。かひなれてわすれもやらじ鶯の。こがねかたなでこふて見よかしと。一首つらねてやつて御座れば。あの方よりも、春過て夏季に戻せ鶯の。又来る春を我ぞ待つと返哥致され、早速鶯をこされて御座る。やれく嬉しや、先此春ハ我等の楽ミで御座る。先是に置て音を聞ませう大臣柱ノ方ニ置
アド笛ノ座ニ下ニ居ルシテ罷出たる者ハ「是ハ」此隣に住居致す者で御座る。此中宿に斗り居れば気がうつしてわるい。今日ハ罷出、小鳥を指、心をなぐさまばやと存る。先そりく参らふ。また宿に居れば心がうつするが。此様に外へ出れば、気が晴て面白ふ御座る。いや鶯が居るやらさへずるが、あれく扱もよい音かな、程遠ふハなひが、どこに居るぞ。ゑい爰に居る、さいてくりやう アド是ハ夫ハ何事

を召さるゝぞ シテ鶯をさすハ アドやあらろうぜきな。かごに入て有鳥をさそふとハ。是ハ某が飼鳥でおじやる シテ何じや、其方の飼鳥じや アドおんでもない事 シテたとへ飼鳥にもせよ、何鳥にもせよ、さしかゝつて此棹がむてゝハ引れぬ。是非さゝねばならぬよ アド爰な者ハリふじんな事をいふ、指掛ッた其棹が引れずハ、ひかせて見しやうが、ていど引れぬか シテその様に腹を立しますな。此さほづれが引にひかれぬといふ事ハなひが。そなたへ少無心が有が、聞てたもろふか アド事に依て聞ふが、無心とハ何じやぞ シテ別の事でもない。此扇子をおませうが、鶯をさゝしてたもるまひか アド安い事なれ共扇子づれにかへる鶯でハおりなひよ シテ成るまいか アド中々ならぬ シテ何とまた男の一腰をやらふが、ささしておくりやるまいか アド一腰とあれば又思案所じやが。夫ならバ一指でさひたるバ、鶯をやらふぞ。若又一指でさしそこなハば、其一腰も鶯もやらぬが、合点か シテ中々一指にゑさゝずハ、鶯も一腰も其方の物よ アド然らバ先、一腰を此方へおわたしやれシテ心得た、是ハ渡したり アド只一指でおじやるぞ シテ中々一指じや アド是ハ其様に近ふ寄てハならぬ、とつと跡へよりてさゝしませ シテ是からさひた、あれからさいたとて、何程の事があらふぞ アドいやく籠の内の鳥を、其様に側へ寄りてさ

す事ハならぬ、跡へよらしませ シテ夫ハつれない事をおしや
 る アド何のつれ無とハ、是から指しませ シテ是からハあまり
 じや、もつとよせてたもれ アドいかなく、跡からでなけれ
 バならぬぞ シテ是非におよばぬ、是からさそふ迄 アド一指で
 おじやるぞ シテはて一指ならバ一さしよ
イロイロネラウテ
 サシソコナフ

アド夫と指そこなふたハ。先一腰ハ某が物じや
 シテナふく、あまり残り多い事じや、今一指さしてたもれ
 アドいかなく、ならぬぞく シテ是に付て一首うかふだに、
 ひらにたのむぞ アド夫ハ又何とうかふだぞ シテ物と アド何
 と シテ初春の我が一腰も驚も、さふでぞ帰る本の住家にと致
 したハ アド是ハ近比面白ひ哥を掛られて、返哥を致さねバ口
 無きものに生るゝと有る程に、返哥を致そふ シテ返哥にハ其
 驚を呉さしませ アド号もあらふか シテ何と アド驚も此一腰
 もさふバこそ、指さは腰にさして行らん、腰がるに早ふお帰ら
 れ シテ是と夫ハだうよくじや、宿に是より能差かへが有る、
 夫をやらふ程に、是ハ先おかやしやれ アド勝負に勝て取たれ
 バ、返す事ハならぬよ シテ是非ともかへせ アド是ハらうぜぎ
 をするか合、シテトアドト入カハリ、アドハ少サ刀ヲヒツタクリ、橋掛リヘニゲ
 行、シテハ 鳥籠ヲ見テ シテいや、此鳥さへあれバ一腰も何もいらぬ事じや
 アドやいく、其驚おこせ シテ是ハ某が驚よ アドいやおのれ

ハラうぜきな、やる事でハなひぞ シテヲ大臣柱ノ方ヘ追ツメ、見付柱ノ
 方ヘシテニゲ行、直ニニゲハイル、ア
 ド跡ヨリヲ
 イコム也

同

シテ餌指、初に出、此隣の餌指で御座る、今日も野に出、小鳥を指ふと存る、野へ
 行、マダ時分も早い程に、先是に待ふ アド長袴にて鳥カゴヲ持出ナガラ名乗ル
 此隣の者で御座る、某常と小鳥にすいて御座るが、野へ出て
 シテ漸と時分もよひ程か、鳥ハいぬか存ぬ 彼鳥ヲ見テサ
 ソフトスル

(4) 松囃子 万歳太郎とも

弟是ハ此隣に住居致す者で御座る。何角申内に、早正月に成
 て御座る。毎も此節松囃子を勤に参る者が御座るが、何と致や
 らん、当年ハおそふ御座る。夫に付某の兄が御座るが、此方へ
 も未松囃子を勤に伺公致ぬか、参りて尋ふと存る。先参らふ、
 毎も早く勤に参るが、何とて是ハおそひ事で御座るぞ。兄の方
 で尋ましたらバ、様子が知れませう。いや参る程に是じや、も
 のもふく 兄いや表に物もふと有る、出ぬか。案内とハどな
 たで御座る。ゑい其方ならバ、直におはいりやいで 弟追付申、
 只今参るも別の事で御座らぬ、少尋度事があつて参て御座る
 兄夫ハいか様の事でばしおりやるぞ 弟毎も此節万歳太郎が松
 囃子を勤に参るが、未此方へハ見へませぬが、何と爰元へハ勤

に参りて御座るか 兄此方へハ定ッて今日参るが、定て追付参るであらふ。其方も是で見物さしませ 弟扱ハ今日さだまつて是へ勤に参るか 兄中々 弟夫義ならバ、是にて見物致ませう 兄先下におじやれ 弟心得ました シテ罷出たる者ハ、落中^(落)に住居致す万歳太良と申者で御座る。毎も正月になれば、松囃子を勤に参る旦那方が御座るが。誠に光陰の過るハ流るゝ水、矢の如しと世話にも申が、去年の正月が今日此頃^ッの様に御座るが、はや年若やぎ月日の始りと、今日ハ元日になりました、夫に付、毎も旦那衆より年の暮に御人を下されて、弥例年の通元日にハ早々参り松囃子を勤る様にとありて、年とり俵物を下さるゝが、爰に誰殿と申御方と、其弟の誰殿と御兩人より、銘々に俵物を下さるゝが、何と思召てやらん、旧冬ハ其御沙汰が御座なかつたが、定て是ハ何角取紛させられて、失念の成されて御度らふ、去ながら御兩人の内御一人ハ御失念なさらふ共、今吾人の御方にハ御失念ハ有まい事じやが、是ハ不思議な事じやまで、又旧冬御音信の下されず、御人も参らぬといふても、此度勤に行ぬもいかゞなれば、先御両所へ参りて御座らバ、又思召出させらるゝ事も御座らふ、若又存じ出させられずハ、何とにおもしろおかしう申なして、思ひ出させらるゝ様に致そふと存る、そろ／＼と参らふ、誠に、数年御失念なく年取り俵物を下さるゝに、

何とて此度ハわすれて御座るぞ、随分物事はつな御方で、何事も失念成さるゝ御人でハ無が、不思議な事で御座る、あれへ参りたらバ様子がしれませう、いや参る程に是じや、物もふ案内もふ 兄表に物もふが有る、誰も出ぬか、案内とハ誰じや、ゑい太郎、先以て改年目出度おじやる シテ御意の如く毎もとハ申ながら、取分当年ハお目出度正月で御座りまする、其「方」様にも、おわこふならせられましたよ 兄中々互に其通じや、扱毎もより其方のおじやり様がおそひとて、弟の誰も爰へ尋に來て、いまだ爰に居らるゝ程に、其方のお出やつた通を申^(さう) シテ左様で御座りませう、某も随分早ふ参らふと仕りますれ共、何が今日の目出度折なれば、朝いわるの、やれ神祭りの杯と致て延引に成ましたよ 兄尤でこそおじやれ、何方も其通りじや、誰殿おじやるか、只今太郎が参られて御座る 弟何と太郎がわせまして御座るか、扱々待兼て居たに、よふおじやつたよ、先目出度おじやる、某の存るハ、毎年の事じやに何とて失念の召れた事ぞと存じ、是まで尋に來ておじやるハ シテいかな／＼、御嘉例の御松囃子なれば、某ハ旧冬よりあなたから行ふ、やれ此方から行ふと、今日を待兼て居ますれば、そこ元様にハ御失念なされましても、此太郎ハ忘れまする事でハ御座りませぬが、各々様にハ何もわすれさせられませぬか 兄此方にハ兩人此様

に云合て待て居る程の事なれば、わするゝ事ハなひよ、さあ
 〱嘉例の通り、目出度松囃子をお初やれ シテ心得ました、

先松囃子を始ませう

アド二人ハ
下ニ居ル

シテハ橋掛
へ行テ

是ハ扱、毎年下さる

ゝ年取俵物をわすれて居ませらるゝに依て、思ひ出さるゝ様に
 と存じ、何も忘させられた事ハ御座らぬかと申共、氣ハ付へい

て兩人此様に云合て待て居る程の事なれば忘るゝ事ハなひ、よ
 ふ忘れさせられまいぞ、御兩人ともに誠に云合た様にわすれて

御座る物、よひ〱囃子事で思ひ出させらるゝよふに仕らふ、

我人ともに、その行ぬ事ハ例になりたがるものじや、仕り様

がある

下ニ居テ
餅酒同断

(以下節付アリ)
改玉の年の始の門ひらき

舞
ハタラキ

松竹かざ

りわかやぎて〱 (以下コトバ) 詞あなたの門へいさしらず、こなたの門も

いさしらず、我も又しらぬなりやそうよの、 (以下コトバ) しやつきや〱、

しやつき〱〱やゑい、さらバ目出度御座る 兄いや是〱

太郎、毎もとハ囃子よふが違ふておじやる、例年の通にはやさ

しませ シテいや別に違ふ事ハ御座りませぬ、夫ハ其方様の御

失念故で御座りませう、某ハ毎年の事なれば能覚て居りまする

よ 兄いや〱、なる程此方に能覚て居る、失念ハ致ぬ、毎年

の通りにはやさしませ シテ左様に仰られても、御失念なされ

た事が御座る 兄何事でおじやるぞ シテ毎年旧冬お人を下され

ますれども、御失念成れたればこそお人も参りませなんだが、

某ハ失念なふして今日勤に参りました 兄誠に毎も押詰て、松

囃子の事をいふてやるに、是ハはたと失念致た、其段ハ詫言申

程に、毎の通にはやさしませ シテまだ御座る 兄別に最早失

念ハあるまいが シテ毎も旧冬お人を下されます時に、もの

が、あふ夫お人も下されませなんだ、最早お暇申ませう 兄い

や是〱、扱も〱近頃面目も無、まだ失念の致た事がある、先

おまちやれ シテ其方様に何も御失念の、さるゝ事ハ御座りま

すまいがなあ、いや漸と思ひ出されたそふなよ 兄毎も旧冬年

取り俵物を遣すに、はたと失念致た シテ夫ハくるしうなひ事

で御座る、旧冬御失念で下されませねバ、当年の暮にかさねさ

せられて下されませうず、少も是ハくるしう無事で御座る、只

号参りませう 兄いや〱、則只今石壺ッ持せてやらふ程に、

機嫌よふわつさりとはやさしませ シテ夫ハ近頃忝ふ御座る、

然らば毎の通り、目出度囃子ませう 兄機げん能はやさしませ

シテ畏て御座る、あなたの門ハ栄へたが、こなたの門へいさし

らず、我も少と栄へたりやそよふの、 (以下コトバ) しやつき〱〱やいや

あ グワ 兄いや是〱先待しませ、少内談致す事が有よ シテ某

ハまだ是から方〱へ勤に参らねバ成ませぬ、最早お暇申ませう

兄是〱先おまちやれ シテチャ(ツ)ボノゴトク
ウシロヨリキク 兄なふ〱誰殿、其方

ハ旧冬太郎が方へ音信の召れたか 弟去れバ音信ハ定て遣した

で御座らふが シテいかなく、まだ下されませぬよ ト云テロニ
手ヲアツル

シテいやお暇申ませう 兄是と先おまちやれ 弟扱と面目もなひ

ハ、毎も旧冬年取俵物を遣すを、はたと失念した、則只今半石

持せて遣そふ、毎のごとく目出度はやさしませ シテ半石程の

物ハ御失念成ておかせられませ、只号参りませう 弟是と其儀

ならバ、石一ツ遣す程に目出度はやさしませ シテいや御無用

で御座るよ 弟平にめでたふはやさしませ シテで御座ります

か、是ハ忝ふ御座る、御兩人共に御嘉例の通り俵物を下された

れば、一入某もよろこびます、此上ハ弥御両所ながら、当年

より目出度事の打つゞき御繁昌に榮へさせらるゝ様に、此太郎

も榮へまする様に目出度かつこを打ませう 二人是ハ一段と目

出度事じや、急で拵へさしませ シテ畏て御座る 兄扱と其方

にも某にも、何角旧冬ハ取紛れて、太郎が方への音信をはたと

失念のして御座る程にの 弟さればく、某も失念致て御座る、

太郎が何角申ハ尤で御座るよ シテ左有バ目出度はやしませう、

改る年の始の門ひらき、松竹かざり若やぎて、そなたの門が榮

へたりや、こなたの門も榮へて、我もくわつと榮へた、いやま

しにさかへたりやそよのふ 是ヨリカツコ
トビトメ也 (以下節付アリ) あらく目出度や

くな、かつこ苔深く、鳥驚かぬ御代なれば、弓ハ袋、釵ハ箱

中グワシ扇ニテラサマ サシ扇
大小ノ前迄出テ小マハリ マハリ 壽命長遠に、納る国こそ目出度けれ

(以下コトバ)
ゑいや、いや

(5) 花戦

桜是ハ江州志賀の山桜にて候、今ハ天下太平豊なる御代なれ

バ、春も一入長閑なるに付、四方の山この花木、此志賀の山に

寄合、集會シユエの興行有べきとの事なれば、当山の花木残らず其分

心得候へく シホガマ次第影口びるおうごかせバく、花もの

いへるためしかな 詞是ハしほがまの何某にて候、今朝納る御代

なれば、江州志賀の山桜にて、集會の興行御座候に付、楊貴妃

児桜を供なひ申、只今志賀の山へと急ぎ候 道行花ばな敷も咲

連てく、山端ミナト越て小原野や、瀬りやうしづ原跡下に見て、けふ

九重に程近き、志賀の山にも着にけりく (以下節付アリ) (以下コトバ) 詞何れも是ハはや

志賀山桜のたちで御座る、先案内乞申ずる間、かうく参られ

候へ 心得申候 シホガマいかに此花室へ案内申候 山桜いや花

宅の門に案内がある、物もふとハたそ、ゑい、しほがまの何某

殿、是ハいづれも早こと御出なされたよ、先奥山へ御通りなさ

れ候へ シホガマ心得て御座る 山桜先以て此頃ハ、庭桜に興行

の事御申下され、祝着致て御座る シホガマ仰の如く、内より

申通世間の衆中ハ、我と共の元に集り、御酒ゑんのなされて、

さすぞ、おさゆるか、思ひざしの、つけざしの杯とありて、謡

つ舞つなさるゝハ、何と浦山敷物でハ御座ないか、何れも又何と思召ぞ 山桜仰らるゝ通、我々共も是のみ浦山敷存る、何とぞ長閑なる折節ハ、少しゆかうをもよふ致らばよからふと存る所に、何某殿の御案内により、れき／＼達の御出なさるゝと存じ、所の名酒を用意致て御座る程に、先御酒を一ツ何れもまいるまひか シホガマ夫（は）能調義をなされて御座る、然らば是へ出させられ 山桜心得て御座る、さあらば何某殿より始させられシホガマ先山桜殿より始させられ 山桜いや先其元よりまいれシホガマ夫ならバ若い衆の内より始させられ 楊貴妃児桜二人先其元より受させられ シホガマ是ハはやう御座る 山桜さあ／＼参れ シホガマ是ハ名酒とて、扱ゝ能御酒で御座る 楊貴妃童おしやく致、山桜殿へ進ませう、いざまいれ 山桜是ハ慮外で御座る、少謡ハせられ 何ニテモ小謡 久敷児桜殿の舞を見ませぬ、少舞ハせられ さあらバ舞ませう 小舞有り 桃是ハ伏見の里に住桃花で座る、承ば志賀の山桜のたちにて、楊貴妃児桜杯の集会の興行御座候よし風聞致程に、参りて集会に入ばと存る、先参らふ、誠に此間ハ世間も長閑なれば、此節の集会ハさぞ面白からふと存るよ、いや何角申程に是じや、先案内申、物もふ案内もふ、いや誰も出ぬは、殊の外奥の山が賑々敷聞ゆる、苦からず直に通る、すい参申 楊貴妃いや何れも、是へ見馴ぬ花の

出られて御座る、おとがめなされ候へ 山桜是ハ桃花にてあるよ、何とてりやうじなる振舞、そのき候へ 桃集会の座敷へすいさん申上ハ、楊貴妃児桜のお盃を申受ずハ立去まじく候 山桜やあらふぜきなる事を申、のかずハ目に物を見せうぞ 桃たとへ命を取らるゝ共、此座敷ハ立去るまじいぞ 山桜夫ハ誠か 桃誠じや 山桜心実か 桃おんでも無事 山桜やあらすいさんなる者よ、何れも御座れ、引立ませう 桃是ハ何とする何とするとハ、おのれ／＼ 橋掛リーノ松迄ツレ行皆ミフム心アリ 桃なふ腹立や／＼、此様に桃花をふみちらした程に、在所の花実共をかりもよふして、只今思ひ知らせうぞ、なふ／＼腹立や／＼ 中入 山桜やあ／＼なにと申ぞ、桃花をふみちらしたるにより、花実共をかり催して、此所へ押寄来ると申か、何れも御聞候へ、桃花をふみちらせし其うらみに、花実共をかりもよふし、只今此所へ押寄ると申候、我等の存候ハ、少人女性の御座候へバ、先々此衆中を何方へなりとも早く落し申、其後じんじやうに勝負を達し申と存るが、各いかゞ思召成され候ぞ シホガマ是ハ尤にて候、いか様とも然るべき様に御計らひ成れ候へ 山桜号々御座候へ 切戸ヨリ楊貴妃児桜入ル 先々楊貴妃児桜を裏道より山中越に落し申て候、何れも物の具用意なされ候へ 心得申候 桃一セイ 春なれや、霞のむちに此駒の、我唐崎にすゝむらん 梨爰にこそ我ありの実と

与力して 梅是安からぬにが梅も、共に与力とすゝみける
 三人思ひくくの打物を、かたがて時をぞ上にける (節) シホガマ詞城
 の内には是を見て、物としや何程の事のあるべきと、高き所へ
 つるくとはしり上り、あれ打とれと下知をなす 桃すへ。時
 分ハ能ぞ与力の者と、跡にさがりて腰を掛、長太刀かひ込かひ
 く敷も フシざいふりたつれば与力の者、おめきさげんで戦ふ (以下節付アリ)
 たり カケリ 打合アリ 桃其時桃実こらへ兼 (以下節付ナシ) 地其時桃実こらへかねて、
 長太刀柄長くおつとりのべて、爰の岩間、かしこの木影、心を
 くばつて、仁王立にぞ立たりける (節) 早笛ニテ 嵐ノ精出ル 嵐抑是ハ、大空に
 住める嵐なり (節) 詞荒物こし花戦、只一吹にと吹立れば (以下節付アリ) 地桃実
 もしほがまも、嵐と共にさそへれてく、何もなしとぞ成にける (節)

(6) 昆布施

アド是ハ此隣に住居致者で御座る。某存る事のあれば。出家
 によらず尼に寄らず、拾巻宛の布施を致さふと存る。先高札を
 上ませう。此高札に付て、出家尼に寄らず参られたるに於ハ、
 拾巻の布施を致さふする間。其分心得候へく シテ罷出たる
 者ハ。此隣に住居致者で御座る。何角と申内に早年の暮に成り
 まする。夫に付、先女共を呼出して談合致事が御座る程に、呼
 出そふと存る。是のお居やるかく 女童を呼バせらるゝはい

まめかしい、何事で御座るぞ シテ先是へお出やれ。其方を呼
 出すも別の事でなひ。何角と致す内、早年の暮になる。近比面
 目もなひ事なれ共年とり物がなひ。其方の親里へ無心が云たひ
 が何としたものであらふぞ。此談合をせうと思ふての事じや
 女尤でハ御座れ共。親里へも其様に、節々無心がいわれますま
 ひ。又外様へたのませられたがよふ御座る シテ外様とても別
 に頼もふ方もおりなひが、何と致した物であらふぞ 女童が思ひ
 まするハ、旦那寺へたのませられらば能御座るふと存る シテ
 是も節々の事なれば、最早頼まれませまひ 女尤節々の事なれ
 共。此度ハ童も参りて、ともく頼みましたらば、何とぞ調
 ふらぬ事ハ御座るまひと (「存る」ヲ消ス) シテ如何様其方がいう
 通り。毎度の事ながら、兩人して頼ふだならば、何とぞ調そふ
 なものじや。夫ならば、いざ同道して参らふか 女なる程よふ
 御座る シテ追付参らふ、いざおじやれ 女心得ました シテ此
 度無心をいうたらば、重てより何方へも申さぬ様に某がせひ出
 して見せうぞ。いや何角と申内には是じや。物申、案内もふ
 住まいや表に案内が有。ものもふとハ誰じや。いや是ハ珍敷、
 夫婦連での御出じや。先はいらしませ。何と当年もはや暮が近
 ふ成ツたが。其方ハ毎もより仕廻が能やら。是ハ早う歳暮の心
 で出さしましたか シテされバ其事で御座る。先はや左様なる

心指やら何やかやで参りまして御座る 住寺夫ハ近比過分にお
りやる 女お歳暮の心指で二人が参れバ能ふ御座れ共。其様な
事でハ御座りませぬ 住寺夫ハ何とやらん心元なひおしやりよ
ふじやが、何とまた召されとぞ^(た) シテ女共が申通り、何共面目
も御座らぬ参りよふで御座るハ。節この事で御座れば、申出し
兼て居ります 住寺扱ハ又何ぞ無心が有りての事か シテさす
がお住寺様で御座るハ、おさとりがはやう御座ります 住寺尤
に存るが、愚僧も此暮ハ寺の修理何角に付仕廻兼て居る事なれ
バ、其方へ御用にハ得立まい シテ御尤で御座る。節この事な
れば、是悲共とハ此度ハへ申ませぬ^(え) 女左様でハ御座らふずれ
共。何とも迷惑いたします事なれば。御思案の被_レ成て下され
ませ 住寺扱ハ気の毒な事じや。何卒是ハしておまし度事じや
が。いや能事が有るハ。山一ツあなたに有徳な人が有るが。聞
バ心指の深ひ人で、出家尼によらず拾貫宛の布施を召さるゝと
の高札を上げられたと聞た。其方ハ常に何経にても能覚えてよま
します程に。出家にさまをかへて行しまして、拾貫の布施をと
り。先暮をのがしませぬか シテ是ハ幸な事を思召出して下
された、此上で御座ればなる程出家になりませう程に、坊主に
被_レ成て下されませ 住寺何と其方ハ合点でおじやるか 女何が
扱此上で御座る程に、よき様に頼みます。其上先程仰らるゝ

ハ、出家尼によらず拾貫宛の布施じやと聞ましたれば、童も尼
になりまして拾貫の布施を取ましたらバ、心安年がとられませ
う程に。童も尼になされて被_レ下ませ 住寺是ハ能き思ひ立じや。
兩人して貳拾貫とらしましたらバ、能正月を召さりよう、何と
其方ハ合点でおじやるか シテ何が扱此上で御座れば、兎角能
様に頼みます 住寺然らバつむりをかくもましませ^(よ) シテ心得
ました 住寺南無というも帰命なり、帰命というも南無とよむ、
さんきく きゑん仏く、扱ハ能坊主じやハ。左有バ其方も
よくもましませ、さんきく南無きゑん仏く、是も能にやう
たぞ。扱兩人ハ衣を合力致さふ、是もきさしませ。兩人とも
に衣を着さしましたれば。俄坊主の様にハ見へぬ シテ近比忝
ふ御座る。是より直に高札の方へ参りませう 住寺なる程兩人
共に勤ておじやれ、お帰りやつたらバ此方へ来さしませ。あの
方の咄しをも聞ふぞ シテ心得ました。布施をとつて参り、何
角の御物語致ませう。号参る 住寺よふおりやつた シテ扱ハ是
ハ珍敷駄になつた。去ながら先此度さへしのひだらバ、又髪を
はやそふ 女其通で御座る。又互に髪をはやしませう シテいや
是に高札がある。何と出家によらず尼に寄らず。拾巻宛布施を
被_レ下りやう。扱ハ是じや、先案内をこおふ。物申案内もふ
アディヤ表に案内がある。物もふとはたそ^{シテ} 女高札に付参りて

御座る アドよふこそ御座つたれ。兩人共に奥へ通りめされ

シテ女心得ました アド望ミの衆が参られた、勤をさせませうと

存る。御兩人共に勤を始て下され シテ心得て御座る 女童

ハお経を存ぜぬが、何としませう シテ某がよみはじめう程に、

よひかげんにまをあわさしませ 二人共ニ
経ヲヨム アド扱こじゆうに御

座つた、御兩人ともに御苦労で御座る。扱こ高札の通進します

る シテ是ハ又おくわし迄忝ふ御座る アドいや布施で御座る

シテ扱ハ是も布施で御座るか、先いたゞきませう アド御兩人へ

申、御逗留もなされませと申度御座れども、他所の御出家達を

一夜も留ます事が所の法度で御座れバ。得留ませぬ。御勝手

次第に御帰り被成ませ シテなる程逗留ハ致しますまひ、高札の

通のお布施を被下 アド夫がお布施で御座る シテいや是ハ是、

かの拾貫の布施を被下 アド夫が拾巻の布施で御座る シテやあ

ら其方にハ出家や尼をおなぶりなさるゝか、是ハ昆布で御座る。

高札の鳥目拾貫文ヅ、渡させられ アド扱ハ鳥目の事と思召か

シテ又鳥目でなふて何で御座らふぞ アド拾巻というのは昆布拾枚

の事、老枚を巻、式枚三枚を式巻三巻と申、鳥目の事でハ御

座らぬよ シテ夫でも旦那の御坊のおしやるにハ、拾貫の布施

を召さるるとおしやつたに依て。俄に夫婦が此様に髪をすつて

来て、昆布拾枚で年が越りやうか、髪をはやして返さしませ

女童も髪をはやして返さしませ アド夫を某が存じた事か、髪

のはへ時分にハはやう迄よ シテそふいうても是悲はやさせね (ママ)

なきかぬぞ 女今爰で髪をはやして返せく アドやあら兩人ハ

理無尽な事をいふ。其様に今俄に髪がとふはやさるゝものじや。

はてけのはや(う)時にハはよふまで 二人なふ夫とらへて被下、

やるまいぞく 追込

(7) 連雀

目代罷出たる者ハ、当所の目代で御座る、此所御福貴に付新

市を立させらるゝ、老若男女に限らず、思ひく品の持出、

一の棚を舒たる者には、則市司を仰付らりようとの御事なれば、

先高札を上ふと存る イヅレモ
同断 女童ハ此隣で酒を売買致者で御

座る、当所御福貴に付、新市をお立なさるゝ、早く参一の棚に

舒たる者にハ、市司を仰付させらりよふとの御高札が上りたる

と申故、何率市司を童に仰付被下るゝ様にと存じ早く罷出た、

先急で参り一の棚を舒ふと存る、いまだ夜ふかに御座れば、誰

も棚を舒る者も御座るまいに依て、市司ハ童にきわまつた物じ

や、何角と申内ニ是が市場じや、先何者も見へませぬ、扱ハ童

が市司じやに、よそふな所に広くと酒見せを舒りませう。何れ

も酒が御用ならバすいきやう申さふ。いや殊の外夜深な、少ま

どろみませふ シテ是ハ此隣に住居致連雀売で御座る、当所御福貴に付、新市をお立なさるゝ、何者にハ寄まい早々罷出、一の棚をかざりたる者にハ市司を仰付させらりやうとの高札が上ツたと申、某一の棚を飾らふと存じ、早々罷出た、先急で参らふ。誠に、か様な連雀づれを商売致す共、市司を請たまわるならば、いかやうの商売人も某が手下に付て、思ひの儘に商売致さば心嬉敷事で御座らふ、ゑい是以高札が上げてある、何々老若男女に限らず、商売の品々に寄らず、早々参り一の棚を飾たるに於ハ、後々末代迄も市司を仰付られ候べく候、扱も墨黒にべつたりとかゝれた、先高札を懷中致そふ、扱ハ何者もいまだ参らぬと見へて高札が其儘ある、某が市司にハ極まつた物じや、よそふな所に広こと見せをかざりませう、やあ是に何者やらん酒見せを飾て前後もなふせつて居る、扱ハ先を越れた、併高札ハ某が懷中致したに依て先慥な、爰元に見世を飾らふ、何れも連雀が御用ならばすいきやう申そふ、未夜深なに少まどろみませう 女ヲキテセリ合 鍋ハ撥同断也 目代やいゝ、是ハ何事じや、先まてゝ 兩足 ハケテ 此納りたる御代に何を論ずるぞ シテ其方様ハいかやうなお方で御座ります (乱テヲ正ス) 目代当所の目代じや シテ先お礼申上まする、某ハ所に住居致す連雀売で御座るが、当所御福貴に付新市をお立被_レ成るゝ御高札の表に任せて、早々参り見世

を飾り居ますれば、あの者がのけと申せば只今の通にりやうじを致ます、急度仰付られて被_レ下ませ 目代扱ハ汝が先に来たかシテ中々某が先で御座る 目代やいゝ、見れば汝ハ女じやが、御せいすひな御代に何とて論をするぞ 女おまへハどなたで御座ります 目代当所の目代じや 女先お礼申上まする、童ハ此所にて酒商売致すが、目出度新市をお立なさるゝ御高札のよしを承りまして、早々此所に酒見世を飾りまして、余り夜深に御座ります故、少まどろみました内に、あの者が童が見世の先にふせつて居まするによつて、のけと申せばのくまいと申まする程に、急度御せんぎなされて被_レ下ませ 目代扱ハ汝が先か 女中と童が先で御座りまする 目代やいゝ、あの者が口を聞バ夜深より来て居るといふが、汝ハりふじんな事を申よ シテ由々夜深より参たると申共、某が沓番に参りたるしやうこにハ、高札を落し懷中致しております、是が先に参りたしやうこで御座る、市司ハ某で御座りまする程に、左様に思召て被_レ下ませ 目代是ハしかとした事じや、女が先に来らバ高札を落す筈じやに、扱ハ女が理不尽者じや、云付てとらせう、やいゝ、あの者が先のしやうこにハ高札を落し懷中して居る、市司ハあの者じや、かれが下知につけ 女はあ尤で御座る、童ハあまり夜深より参りましたに依て、何方に高札が御座るをもゑ見ませなんで

御座る、よしハ如何様共申さバ申させて置せられませ、先思召ても御らんぜられ、此酒と申物ハ目出度物で、諸神へ神酒を備やるの、御祝言にハ三献の九献のと申て酒程目出度物ハ御座らぬ、殊に女ハ門^{カド}ひらきと申ていわゝせられる、童こそ市司で御座らふづれ、たとへ高札を懷中致たれバとて、連雀づれに市司ハあまりな事で御座ります、先ハ童で御座る程に、聞分させられて被^レ下ませ 目代是ハ尤じや、汝が先なれ共夜深より来て高札が何方に有るもゑ見ず、又あの者は跡より来れども、高札を懷中して居る、何共ひはんの分にくひ、此上ハ兩人何にても勝負をさせて、勝負に依て市司を申付が、何を勝負にするぞシテ御尤で御座ります、しやうぶ迄も御座りませぬ、高札がしやうこで御座ります 目代尤なれ共、女も夜深より来て、高札が何方にあるも見へぬ程夜を込て来た所がしやうこなれバ、兎角此上ハ何にても勝負のかちまけで、分てとらせう シテ然らバ勝負に何を致ませうぞ、ゑい存じ出した、勝負にハ角力をとりませう 目代いやゝゝ、女と相撲ハとられまひ、汝が勝にハきハまつた事じや、互に相応なしやうぶ事をせひ シテいやゝゝ角力程な勝負ハ御座りませぬ、昔、雅^(雅)高雅^(雅)仁御位争ひの時も、十つがいのけい馬、十番の角力で御座りました、馬ハ持ませず、けい馬ハなりますまい、相撲程な事ハ御座りませぬよ

目代是ハ汝がいう通じや、去ながら女に尋て其上の事にさせう、やいゝゝ、汝が先にもせよ高札を落さず、又あの者ハ跡にもせよ高札を懷中して居る、何共ひはんが分^ケられぬに依て、兩人に勝負をさせて、勝まけによつて市司を申付るが、あの者ハ角力をとろふというが、汝も角力の相手になるか 女あられもなひ、女の身で角力がとられませうか、勝負には及びませぬ、只あきないの位に依て、ひはんの分^ケて被^レ下ませ、きやうこつも無、そもやゝゝ何とて角力が取られませうぞ、童ハなりませぬシテ中々勝負ハすもふ程な事ハ御座りませぬぞ、あきない物の位と申事ハ御座りませぬぞ、角力の勝負^{カチマケ}で市司を仰付させられませ、おのれ只ひとなげになげくりうぞ 目代兎角相撲の勝まけでなければ何れ共分らぬ、是^(ママ)悲すもふをとれ 女わけもなひ事を仰らるゝ、女のすもふをとりましたためしのなひ事で御座る、童ハなりませぬぞ 目代すれバ其方にハ市司を申付る事ハならぬぞよ 女扱何者に仰付らるぞ 目代汝が角力をとらねバ、あの者に市司を申付る シテ中々左様で御座る、市司ハ某に被^レ下るゝぞ、なるまひゝゝ、たとへすもふをとる共、角力の手ハ四十八手、くだけバ八十八手にも取る、おそく所^(ママ)に隠なひすゝめつらなる連雀すもふ女などを相手にハ致さねども、しやうぶの事なれば是悲が無、空^{ソラ}へならバとうり天、下へならばな

らくの底迄打込程に、いらざる勝負を召さりやうより、某が下知ニ付て市末にならしませ 女扱もく口のきいたまゝに申事で御座る、童じやとても是悲に及ハすもふをとりかねうか、いらぬかうげんいわずとも、是へ出さしめ 目代やい、是へ出、某が行事をするぞ、甫手 イヤくく女男ノ左ノ手ヲトリテ脇座ノ方ヘマワシ、又右ノ手ヲトリテ大廻シニ廻ス、男ヤレく先待くト云テ、目代大小ノ前ニ立テ居ルヲ、男左ノ手ニテ目代ヲトラヘル 目代先までく ト云フテケルシテ扱もく思ひの外強ひ女で御座る、最早角力ハとりませ ず、兎角高札を持て居まする某に市司を被下ませ 女いやく、中と勝負づくになされませ、たうり天とやらん、ならくの底とやらんへ打こまれまして、珍敷所が見て参りとふ御座る、勝負ハすもふ程な事ハ御座りませぬぞ 目代さあくじんじやうにして取りませい 目代あの者が最前いやと申時におけバよひもの。扱こつよひ女かな、同じくハ最早角力ハいらぬ物で御座りますかな 目代さあく是へ出、甫手 イヤくく飛達入カハル、又飛達入カハル時、男橋掛リヘニ行ヲ女トラヘニ行ク、フリ切、大臣柱迄ニゲルヲ追廻シ、又目付柱ヘニゲル、追廻セバ又大臣柱ヘ行ヲトラヘテ、小マタヲトリ、一ベン廻リ正面ニテ女まいッたの 女ハ入也 シテあいたく、扱もく腰の骨を打おつた、だうよくな女哉、あいたく、おのれやるまいぞく チガくトシテハイル

(8) 菌山伏

アド主是ハ此隣に住居^{モノ}で御座る、先召遣ふ者を呼出し、申付る事がある、太郎冠者有るか 太郎はあ 主居るか 太郎お前に主汝呼出す事別の事^{ママ}なひ、汝が知る通り、此中庭前に時ならぬ菌が多くはゆる、去る人に尋たれば、是ハ一段目出度事じや、此家の繁昌のずいそふじやとあるが、難法是ハ目出度事でハなひか 太郎御定被成るゝ通、是ハ目出度事で御座ります 主夫に付某が思ふハ、山の法印のしやうたいして、弥福貴繁昌に栄る様ニ加持してもらおふと思うが何とあらふ 太郎是ハ一段と能ふ御座りませう 主其儀ならバ汝ハ山へ上り、法印へいわふハ、此間ハ久敷お目に掛りませぬが、弥御息才に御座りませうづれ、夫に付少お目に掛り頼みましたい事が御座る程に、御太義ながら里へ御下り被成て下されというて呼ましてこひ 太郎畏て御座る 主あゝ 太郎はあ、誠に是ハ目出度事かな、御家の繁昌被成るれば、我等躰迄も嬉敷事じや、先参らふ、御内に御座ればよひが、去ながら常に外へお出被成ぬ程に、定て御内に御座らふと存る、いや何角申内にはじや、先案内申そふ、いかに庵室へ案内申候 シテフクロウ出羽同断、太郎冠者モ同事也 太郎法印の御出にて候 主此方へ御通被成ませと申せ 太郎畏て御座る、此方へ御通り被成ませと申まする シテ心得て有る 主是ハ山下と申し御出忝御座る シテ承り候、扱召寄らるゝハ何の御用にてばし

候ぞ 主お尋申度儀ハ別の事でも御座なひ、此中庭前に時ならぬ菌が多く出生致すが、算を勘へさせられて加持を御頼ましとふ存じ、呼に遣して御座る、御太儀ながら頼みまする シテ心得て御座る、当年ハ何の年月何日ぎんなんばんたんちやうけん武蔵野ハ月の入るべき山もなし草より出て草に入りけり、目出たし、御家ハ子と孫と迄も広くと御繁昌に榮へさせらるゝ御吉左右で御座るよ 主近比大慶に存る、然らバ弥繁昌致す様に、一加持被_レ成て下されませ シテ心得て御座る、一加持仕り申ずる、行者ハ加持に参らんと、ゑんの行者の跡をつぎ、たひこん兩部の峯を分、しつぼうの露を払し鈴掛に、不定_(マヤ)をへだつるにんにくの袈裟、赤木の珠数のいらたかをさら／＼と押もんで、一祈こそいのりたれ、なまくさ_(マヤ)ばんだばさらだ、いろはにほへとちりぬるおわかよたれそつねならむうゐの奥山けふ越て朝来夢見しゑひもせず、ぼろおん／＼ 主夫と爰へも出ました、是ハ扱あれへも出ましたハ、扱も／＼又夫へも出ましたぞ、そりや又出たハ シテたとへ如何なる草びらなりとも、行者の法力つくべきかと、重て珠数を押もんで、東方にござんぜ明王、南方にぐんだりやしや／＼／＼、ちいがしんしやそく座にうせけり シテあら／＼骨折や。此後又も祈るまじ。かれたる声を聞時ハ。／＼、あつきお茶にてやわらげ、

にんにく慈悲の姿にて。齋料とりし身なりけり／＼

(9) 酒盃拜

女童ハ此隣の者で御座る、誠に世間の世話にも、縁につるれバ唐の物と申が、童が夫ハ唐土人で御座る、始の程ハ何を申されても一円合点が参らなんだが、最早今程ハ馴まして、大方の事ハ聞覚えて御座る、併此程ハ珍しき事を申されますハ、日本_{ニッポン}人無心_{シフシツ}尔_ガ我_コ唐_{タウ}国_{コク}妻_{サイ}恋_{レン}というてハ泣、酒盃_{シヤンバイ}拜_{バイ}さすあんばひというてハひた物啼れまするが、是ハ童も合点が参らぬ、爰に誰れと申て、万事にお功者なの方が御座る、是へ参り尋ませうと存じて是迄出た、先参らふ、内に御座ればよいが、あなたハ余り外へ出ぬ御方じや程に、定て内に居させられうと存るよ、いや何角と申程に是じや、物もふ案内もう アドゑひ表に案内が有る、物もふとハたそ、いやそなたならバ案内に及バふか、直にはいりハ召りやいで 女此中ハ久敷お目に掛りませぬが、何れもお息才に御座りまするか アド中々無事に居るが、其方にも息才そふなよ 女童も息才におりまする、扱只今参りましたも別の事でも御座りませぬ、御存知の通に童が夫ハもろこし人で御座るが、只今ハなれまして何事も大かた聞覚えてハ御座るが、此比は又毎に聞馴ぬ事を申てハ、ひた物なされますが、其方様へ

お尋申ましたらバ様子が知れませうと存じ、尋に参りまして御座る アド夫ハ何というて泣事でおじやるぞ 女日本人無心尔我唐国妻恋というてなれまする アド何とおしやる、日本人無心尔我唐国妻恋という 女中ミ左様で御座る アド是ハ別の事でハなひ、則文字に直し、やわらげて見れば我が朝の哥でおじやるは 女何と仰らるゝぞ、是ハ哥で御座りまするか アド中ミ哥でおじやる 女何と申哥で御座りまするぞ アド去ながら、此哥をいうて聞せたらバ、其方の腹を立させませう程に、いうまひよ 女腹の立事が御座らふ共、腹ハ立ますまひ程にきかして被_レ下ませ アド夫ならバ云て聞せふ、日本人無心尔我唐国妻恋というハ、文字をやわらげて見た時に、日の本の人の心のなかりしに、わがもろこしの妻に恋しきといふ事でおりやるよ 女ふく腹立やく、朝夕いとしがりまするに、其様な事をいうて啼まするか、身がもへて腹が立よ アド夫ミ腹を立まひとおしやつたが、おたちやるハ 女まだ御座ります、酒盃拝さすあんばひというなれまするが、是ハ何とした事で御座りまするぞ、しらして被_レ下ませ アド何と酒盃拝さすあんばひ、是も別の事でなひよ、酒盃拝酒の事、さすあんばいとハ肴の事、よきさかなにて数盃酒を呑度という事じやよ 女扱もく、いやしき者で御座る、童が常に酒も肴も沢山にあてがひまするに、

其様にいうてほゆると申事が有るもので御座るか、何角に付て腹の立事哉、何としてよからふじや迄 アドいや是く、其様に腹を立さしますな、其方も如才ハ有まひけれども、あの者も爰で誰をたのもふ者もなし、其方を便りにして居る事じや程に、随分あの者がいうよふにして、あわれミを掛てやらしませ、其方ならで便に思ふ者もなひ程に、随分能き酒肴を調へておまらしやれ 女誠に仰らるゝ通で御座る、此上にも随分心を付て馳走を致ませう、もはや号まいりまする アドおゆきやるか、又何にても合点の行ぬ事があらバ尋に来さしませ 女畏て御座るアドさらバく、よふおじやつた 女はあ、誠に何角に付てお利はつなお方で御座る、如何様な事を尋に参りても埒の明ぬと云事がなひ、先宿へ帰りませう、あなたの仰らるゝ通、童を便にしてお居やるに、此上ながら随分馳走を致ませう、いや是ハ又何方へ行しましたぞ、内にお居やらぬよ、留主の内によき酒肴を調へて置て、お帰り召れたれば馳走を致そふと存る
(二声節付アリ)
シテ東合の郡西。日本の地にすめるなり、是ハもろこし
一セイ唐大明国の者なるが、去子細有て此土に渡り、九州松浦に住居せり。日本人無心尔我唐国妻恋
ト云テ酒盃拝さすあんばひ
ト云テ 女いや帰りましたよ、是ハいかな事、又正躰もなふおむつかるよ、のふく其方の其様におむつかるも、童よく合点

しました、其方のお留主の内によき酒や肴を調へて置ました程に、機嫌の能ふしてさゝを吞せられ 床几ノフタ持出 扇ニテ酒ヲモル シテ唐言葉ニテヨロコブ歟 夫に付、其方へ申度事が御座るへ、此様に御機嫌のよき折こもろこしの小哥じやというて謡わせらるゝが、童ハわけハ存ぜね共、面白ひ事で御座る程に、少諷ふてきかさせられ シテ唐言葉ニテイヤト イウ 女今日程機嫌の能事ハ御座ない、是悲共謡ハせられ シテ唐言葉ニテイヤト 葉ニテ謡テ 聞セウト云 小 哥 すうらんどんにこひちやう。ぶゆがんなんずるほろけなん。かんごひもんかんこいせつば。せいやうちやうおだら 女扱もく面白事で御座る、さらバ其方へさしませう シテ酒請テ、唐音ニテ、團扇ニテ仕形シテ女ニ一サンマヘト所望スル 女童に何ぞ一さし舞へと仰らるゝ事か、童ハ舞とやらんハつひに舞ふた事が御座らぬよ シテ唐音ニテ仕形 シテ是悲マヘ 女夫ならバ童も何ぞ舞ませう 女小舞 シテ唐音ニテ舞 所望スル 女夫ならバ童も何ぞ舞ませう 舞ナリ ヲホムル、團扇 ニテ女ヲアヲギ、機嫌能喜ヒ、又女へ盃ヲサス、女受テ 女久しく其方の楽を見ませぬ、少舞ふて見せさせられ シテ唐音ニテ 女平に舞ふて見せさせられ、此様に其方の機嫌よき時でなければ、所望がなりませぬ、是悲に舞せられ ト女立テ大小ノ シテ下ニ居ナガラ楽笛唐相撲同断、葉ニテ立、拍子ヲ引テ拍子フミ、團扇左ヘトリ、袖返シ、ギヤクニ大廻リシテ、 前ヘノク ミ左右大廻リシテ小廻リシテ打込上羽(扇)左右サシ扇 團扇右ヘトリ、切りテ出、カザヘ大廻リシテ小廻リシテ シテ日本人無心尔我唐国妻恋 ト云テ 女是ハいかな事、是程色々馳走を致すに、又古里の妻が恋敷か シテ酒盃拜さすあんば

い ト云テ 女いや其方ハ此様に酒肴も心の儘に進ずるに、まだ其様な事をおいやるか、のふ腹立や シテ唐音ニテニゲ廻ル、女腹ヲ立テシテヲ追込ナリ

酒盃拜

シテ唐音引 小 哥 すうらんどんにこひちやう。ぶゆがんなんずる。ほろけんくく。かんごひもんこいせつば。ひやうだら 引

(10) 伊勢物語

シテ罷出たる者ハ(是ハ)西国の者で御座る。某末伊勢参宮を仕らぬに依て。此度思ひ立、参宮の心指で罷出た。先そりくゝと参らふ。誠に、遙々の海上なれ共。天照大御神の御利生を請るか。順風なれば浪も静にして、船中心よく乗り。又陸になれども天気能打続、足も軽くして悦ぶ事で御座る。いや爰元ハ何と申所ぞ。やあく何じや。近江の国水海じや。是ハ国本で承りおよんだよりも。広々として。詠め一入有る湖水じや。扱ハ此橋ハ隠もなひかの勢田の長橋で御座らふ。扱もくよい景哉。古哥にも真木の板も苔生ふばかり成にけり。いく世へぬらん勢田のながはしとよまれたるも、此所での事で御座らふ。扱く海上とハ違ふて、陸道を通れば心おもしろき事哉。扱爰元ハ何と申所ぞ、何じや伊勢の国安野郡じや。扱ハはや伊勢の国へ着た。やれく嬉敷事哉。遙々日向の国を立て伊勢地に来る

まで、つゝがなふ足息才で。是一偏に太神宮の御利生と存じ有がたい事で御座る。いや殊の外草臥たれば。幸是に御堂がある、此御堂の縁に少休で参らふ

舞台ノ真中ワキ座ノ方ヲ見テヨコニネル アド出家是ハ

此隣に住居致す齋夢坊と申者で御座る。今朝去方へ齋に参り只今帰る。先そろり／＼と参らふ、毎もとハ申ながら。取分当年ハ殊の外世間共に雨続よふて田がよくうわるゝと申て、何方の在所にも是のみ悦ぶ事で御座る。いや此御堂の縁に心よふ昼ねをして居る者があるよ。是ハ伊勢参宮の者と見へたよ。誠に一すひのねむりに千年をのぶると申が、此事であらふ。是ハ浦山敷事哉、愚僧も是に少休らふで参らふよ

シテトセナカラ合、出家モネル ニノアド

是ハ此在所に住居致す百姓で御座る。今朝ハ心指の事ありて、在所の衆中へ茶を煎じて供養致し。何角と今迄隙入多くして。只今漸々早苗をわけに罷出た、先参らふ。雨つゞきがよふ御座る程に。早苗を分てけふあすの内に田を植させうと存る。いや此御堂に齋夢坊のよねんもなふ昼寝しておじやるよ。是ハ誰じや、伊勢参宮の道者じやよ。是ハたびのつかれにて、前後わきまへず寝入たるハ尤じやが。齋夢坊ハ今朝某の方へ齋に来て、左様に草臥る事も有まいに。是ハ又出家に似合ぬ事じやよ。誠に此御坊ハ何方へ齋ひちに参りても。先にてよくねむるに依て。齋の夢と書て齋夢坊と名付たと申が、誠じやよ。是ハ余り

な事じやにおこしませう。こりや／＼／＼、やれおきよ

二人はつ／＼ シテいや何右衛門殿か、はて心よふ夢を見、ねて居るに。きうなおこしよふできもをつぶしたよ。ニノアドわご

りよは誰じや。某ハ近付でハ無が、何とて某が名をしりたるぞシテけさ程某方へ齋に参りたハ ニノアド某ハ齋に其方ハよばぬよ 出家爰ハ何と申處で御座るぞ ニノアド御坊ハ寝わすれたか、

其方の在所でおじやるハ 出家某ハ日向の者じやに。某が在所とハそちハ何者じや ニノアド何者という事があらふか、其方ハうろたへたの 出家やあらうろたへたとハにくひやつ、所を尋るに所の者ならバ教へハせいで、男に向ッてうろたへたとハすいさんな。参宮道者なれ共堪忍せぬぞ シテ正敷今朝齋に迄よふで、愚僧を近付で無存と其方ハ何事をいうぞ、齋夢坊ハ愚僧じやハ ニノアド是ハ一円合点が行ぬハ、正しう齋夢坊ハ其方でハおりなひか シテ齋夢坊ハ是愚僧じやハ 出家某ハ日向より伊勢参宮する者じやよ ニノアドいよ／＼是ハ合点が行ぬ。先心をしづめて能くおきやれ。^(ママ) 其方何程日向より参宮するとおしやつても、正敷衣を着し坊主でハ無か 出家某を坊主とハ、やあ／＼、是ハ／＼、是ハどふした事じや ニノアド其方何程齋夢坊じやとおしやつても。其方ハ俗人じやハ シテ何と愚僧を俗人じやとハ ニノアドでも坊主でハなひハ シテ是ハ／＼、是ハ又

何とした事じやぞ ニノアドいか様は合点が行ぬが。何とした事ぞ、実と思ひ出した。最前某が兩人をあわたゞしう急におこしたに依て。是はたましいが入かつたものであらふ 出家某はうたがひも無日向の者で、心に違ふた事もなし。其方をついに見た事もないが、姿ハ衣を着坊主じや。是ハ合点のゆかぬ事(ママ)じは シテいか様何右衛門殿のおしやる通り、今朝其方の所へ齋に参りたハ、まがひも無事なり。齋夢坊ハ愚僧じやが。又其方のおしやれば髪をゆひ俗躰じやが。是ハ不思議な事じやよニノアド兎角に是ハ今一度爰に兩人寝させて、某がおこしよふが有る程に。今度度兩人ともにねさしませ シテ其儀ならバ今一度寝よふ程に、出家ハ出家。俗ハ俗と、躰も心も一同する様にしておくりやれ ニノアド心得た。先早く寝さしませ シテ心得た又兩人前ノコニノアド是ハふし義な事哉。誠に昔よりも人の寝入りたるを急におこさぬ物じやと申が、か様の事で御座らふ。是ハ前代未聞の物語になる事で御座るよ。いや漸々ね入りませうに。先齋夢坊からおこしませう。是なふくくく 出家むくく、よふ寝たよ。いや何右衛門殿か。先今朝ハ添う忝ふ御座る、いかふお齋の上で御酒に給よふて。是に少休ましたよ ニノアド尤でおじやる。こちらをおこそう。是このふくくく シテあくく。扱ふ能ふ寝たよ。是ハ殊の外日がたけたハ。是ハど

なたで御座るぞ。よふこそおこして被下ました。某ハ西国方より遙々参宮を致す者で御座るが。殊の外草臥まして。是にまどろみましたよ ニノアド夫々何れも夫でこそよけれ。最前の通りでハ某の迷惑致よ シテ最前の通とハ、夫ハ又何事ではし御座るぞ ニノアド扱ハ様子をしらぬか シテ中々何事も存ぜぬよニノアド又齋夢坊ハおしやらぬか 出家夢にも存ぜぬよ ニノアド夫ならバ咄して聞せう。最前兩人がよく。此所に余念もなふ寝て居さしましたを。某が何心なくあわたゞ敷急におこしたれば、たましいが入り替りたる物であらうハ。齋梵坊ハ参宮の心さじ(ママ)とおしやる。又日向の道者ハ。某に今朝の齋の礼をおしやる。何とも心と躰とが代りたるに依て。某もおこして迷惑致、よく思案のして、兩人を又寝させて。只今そろくとおこしたれば、誠の俗ハ俗、出家ハ出家とわかつておじやるよ シテ是ハ夢にも存ぜぬ、只今の様子を承れば、是ハ不思議な事で御座る。是ハ後々までの物語になる事で御座るよ。扱日もたけて御座る程に、もはやおいとま申そふ(以下節付アリ)さらばいとま申さん 二人あら名残惜や シテ此方も名残惜けれど。あの日をむかふてはるかの伊勢に参りける 二人実もさあり、やよがりもそふよのく シテ下向道のみやげにハく、伊勢管笠やせんばらひ、くじら物さし貝じやくし。青苔ふのり

しやうの笛、買集めとりあつめ、日向の国に帰りけりく

(11) 二九十八

シテ是ハ^{此隣}洛中に住居仕る者で御座る。誠に、申も以かしひ儀で御座れ共。尽こと世の中を見るに貴キ賤キも有り。あるいわ貧も有る中に、某の事ハ天道の恵も受、何心も無、朝夕^{セキ}をゆるく送ります。殊に若年の時分より、歌道儒道に心を寄せ、思ふ友達^{トナリ}寄合。春ハ花秋ハ月と。詠メくらし。茶の湯の道ハ申に及はず。算用迄も心掛、楽こと月日を送る儀で御座る。去ながら、か様に身の上の事ハ申共。此年に成るまで未定る妻が御座無に依て。友達衆より何かと申さるれども。かれの是のと申て不縁^{トナリ}身で御座る。夫に付て清水の觀世音ハ現仏者と御座れバ、妻乞の為に参詣致さうと存て罷出た。先そろりく^{トナリ}と参らふ。此度宿願シの申上て御座らふならバ。似合しい妻も授て下されぬと申事ハ御座るまい程に。随分と信の取て祈誓を掛うと存る。いや参る程に是^{が早清水じや}じや。さらバ拜ミませう。南無大慈大悲の觀世音へ申上ます。私此年ニ成ます迄妻を持ませぬ程に。家内福貴繁昌に榮まする妻をさづけさせられて被^レ下ませい。則是^{ママ}に終夜を仕ります。さらバ少まどろもふ。はあく。扱も有がたき事哉。弥然るべき夜に奉^レ頼ます。去バお告に伺^{マカセ}一の

(ママ) 最門へ参らふ ^{爰にて小袖を被き橋掛の松の所ニ立居る} か様に目の当りに印の御座ら

ふとハ夢に存ぜなんだ。是が最門じやが、されバこそあれにけつかうな駄でお立やつた、急で詞を掛う。いかに申、夫に立せられたはいか様なるお人で御座るぞ。某ハ妻乞の為に当寺へ参詣致、終夜を致て御座れバ。荒たなる御告に伺^セ、是まで参て御座る。此方にも若シ左様の御告ばし御座ッて立せられて御座るか、様子が承りとふ御座る。女妻もなき我が身独りハ唐衣。袖を片敷ひとり寝ぞする。シテ尤で御座る。扱ハ此方へも御告が御座ッたと見へました。某へも御告が御座ッて是迄参て御座るが。去ながら互に此分にてハ御同道がなりませぬ程に。迎の事にお宿を仰られい、迎にやりませふ。女我が^宿庵ハ春の日ながら都にて風の当らぬ町と尋よ。シテ是ハ珍らしい哥じやが、風のあたらぬ町ハ何方で御座らふぞ。いや太方推量仕った。夫ならバ某が思ひ当りを所を、此方の様にやさかななお方へ詞ではいか^{ママ}に御座るに依て。某も哥で申さふ程に、合ましたらバ有様に仰られひ。君が住宿ハ春日や室町の角よりしてはいくつなるらん。女さい二九や^{ト女云捨テ、急ニ入}こ。時シテキモワツブシ。シテ申と喃申。又尋たい事が御座るわひの^{ト云テ舞台ノ間中へ出テ}。はて扱気の毒な事かな、何とした物であらふぞ。唯今云捨にせられたハ。さい二九やこ、是ハ合点の行ぬ事じやが。最前の哥ハ何とやらいわれたが。我が

宿ハ春の日ながら都にて。風のあたため町と尋よといふたハ。
 春の日ながらバ^(ママ)春日通りの事であらふ。扱風の当らぬ所ならバ
 室町であらふ。是ハよいが。さいにくや^(ママ)が合点が行ぬが。
 どこじや知らぬまで。いや思ひ出イタ。西と云字にハさいの^(ママ)声
 が有るに依て。西側じや。扱二九やハ何ト云事じや知らぬ迄。
 是も算用の心にて推量仕^(ママ)ツた。二九十八じや。春日通り室町西
 がわの十八間目じや。うたがひも無、是こ此哥の通りに尋て御
 座らふならバ、お告の事なれバ。よもや行当らぬと申事ハ御座
 るまい。なふく^(ママ)うれしやのく^(ママ)
 さあく^(ママ)おりやれく^(ママ)、最前ハ哥で何かとおしやつたに依て。
 某も漸くと尋当^(ママ)ツた。是と有るも観音の御引合じや程に。深イ
 あんじやと思ふて。末繁昌と互に諸白髪^(ママ)まで添ふ程に嬉敷イと
 思ハしませ。いや、何角いふ内に、是が則家じや程に。奥へ
 通らしませ。先夫にとふど居さしませ。扱いわでも婚禮の事じ
 や程に。盃を致さふ。わごりよ吞ふで差さしませ。む某に初
 いと云事か。夫ならバ身共が吞ふでさそふ。常ハならずも一ッ
 のましませ。目出度謡ふか ^{ト云テ、愛デ悦ビヲノ} ^{ベシヲウタウテモヨシ} 其盃こちへお
 こさしませ。目出度ふま一ッ吞ふで納めう。扱いふも愚^(ママ)な事な
 れ共。わごりよと某ハ観音の御利生の夫婦なれバ。互に心おか
 ずに子中をなひて。万々年も添ふづ。又此比に御^(ママ)れい参リニ手

と手を引ようて、参らふと思へば。此様な嬉しい事ハおじやら
 ぬ。いや最前から気がつかなんだ。きうくつにあらふ、先其被
 を取らしませ。いやとおしやるハ、はづかしさのま^(ママ)でおしや
 らふが。もはや心置事も無程に、平に取らしませ。何程いやと
 おし^(ママ)へやつても対面せねばならぬ。さあく^(ママ)とらしませ ^(ママ)女南
 く此方のいわしらるゝ通り、御告の夫婦で御座れバ。互に中を
 よふ子中をなそふと思へバ、此様なうれしい事ハ御座らぬ
^{ト云内ニシテワキヘヨ} ^{リ、ヒトリゴトニ云} シテはれやれ興がつた顔かなやれ、あれでハ
 一代そハれまいが。いや申よふが御座る。わごりよの云通り、
 何迄も中をよふ添ふずと。扱其方にいふ事が有わひの 女夫ハ何
 事で御座るぞ シテ別の事でも無。其方と夫婦になる事を一門^(ママ)共
 とも相談をせなんだに依て。ちよつと談合をしてこう程に留主^(ママ)
 を頼ぞ 女先待せられい、観音の御告の夫婦なれバ、別に談合
 にも及ませぬ程に爰に御座れ、どちへもやる事ハなりませぬ
 シテ尤なれども姉がいかう堅い者で、此様な事を隠ば腹立まする
 に依て、ちよつといて知らせてかふ 女やあら此方ハ、童を見
 て今となつていやがらせらるゝか、最早此上ハいやでもおふで
 も添ハねバ置ませぬ シテはれやれ是ハ迷惑な事なれども、わ
 ごりよといひかハひた事じや程に。いつまでもそう事ハいやじ
 やぞ 女やい^(ママ)くあの人たらし、どちへ行ぞ。やるまいぞく

(12) 鈍言草

主是ハ此隣の者で御座る。先召遣ふ者を呼出し申付る事が御座る。太郎冠者居かやい シテはあ 主有るか シテはあ。御前に 主汝を呼出スハ別の事でもなひ。某ハ夜前珍敷夢を見たハシテ夫ハいか様なる御夢で御座ります 主一夜の内に書院先に大木の松の木共が数多出生したが。先是ハ目出度瑞相でハ無イカ シテ御意成るゝ通。是ハお目出度御夢相で御座ります。世間に聖人に夢なしとハ申せども。昔唐土に丁固と申者、腹上にまつ生ると見て自らはんじ申ハ。松は十八公と書ケリ。我十八にして官に上らんと有ければあんのごとく。十八の年其国の三公に備はりたると申セバ。頼ふだ御方も御願ハ思召儘に相叶ヒ。子と孫とまでも松の葉の栄へ茂るが如くに。御繁昌成るゝ御瑞相で御座ります」^(ママ) 主誠に汝が申通。此様な目出度事ハ無。夫に付て鞍馬の昆沙門天へ参籠致そふと思ふが何とあらふ シテ是は一段とよふ御座りませう 主其儀ならバささへを用意致せひ シテ畏て御座る まさあゝこひゝ。いや幸今夜ハ八月十五夜名月じや程に。下向に御菩薩池にて月見をして帰らふ シテ誠に今夜ハ名月で御座る。御下向に御菩薩池にて、月見がよふ御座りませう 主いや何角申内に。是ハお前じや、

さらバ拝もふ シテ誠に御前で御座る 主此太刀を持って シテ畏て御座る 主南無多門天武運長久に守らせ給へ。南無多門天ゝ。やい太郎冠者何と思ふぞ。此山ハ何ッ参りても真ことして殊勝な事でハ無イカ シテ御意成るゝ通で御座ります 主是で少酒を吞ふ程に、小筒を開け シテ畏て御座る 主諸君ハ何を用意致たぞ シテ俄の事で御座りましたに依て。調べます間も御座りませなんだ程に。先日伯父の御坊様より参ました物を持って参りました 主誠に頃日何やら下されてあつたが。してなんであつたぞ シテ此方のお好きなさるゝ物で御座ります 主某が好物とハ何じや^(ママ) (シテ)名荷と蓼との漬物で御座ります 主何じや名荷と蓼じや^{メウガ タヂ} シテ中々 主其様な物で酒が吞るゝ物か。殊に名荷といふ物ハ人の喰物で無やい シテでも此方のお好じやと有ッて。伯父御の御坊より参りまして御座る 主夫ハ蓼をこそ好で喰ふ、子細有て。名荷ハたべぬよ シテ私ハ又名荷を好まして、常能下されます 主何じや汝ハ名荷を好て喰う シテ中々 主己が常に物忘をして愚鈍な者じやと思へバ。名荷を喰ふ故じやよ シテ何と名荷を下されますと申て、物忘を致物で御座るか (主)扱ハ子細を知らぬと見へた、次手な^{ツイデ}がらいふて聞せう、能聞 語惣て釈迦の御弟子多キ中に。修利槃特といへるハ愚鈍第一の人にて。我が名さへ覚へ給わで人に

問れて迷惑成るゝ故。我が名を札に書付、竹杖に結付持てありき給ふが。御名ハと問ふ人あれば、荷給ふ札を差出し給ふ程の愚鈍なる人なれば。悟道発明イ成るゝ事もなく。終になくならせ給ふが。其塚より生出たる草を名荷と名付。去るに依て名荷とハ。名を荷と書なり。又愚鈍成る人の塚より生じたる草なれば。鈍言草共いふ。扱蓼ハ阿難尊者智恵第一の御方の空敷ならせ給ふ。その塚より生出たる草なれば。是を蓼といふ。利根なる人の塚より生じたる草なれば、利根草共是をいふ。智恵あるものも名荷を喰ハすれば鈍になる。鈍なるものも蓼を喰はすれば利根になる。況己ハ愚鈍第一の身にて。名荷を喰ふ事ならバ。弥物忘をして用に立まひ。以後ハ名荷を喰ふな シテ左様に物忘を致す物ならバ、以後ハ下されますまひ 主構で喰ふたらハ「ならバ」曲事であるぞ シテ畏て御座る。下されますまひ 主いや今の長物語に障をとつた。いざ下向せう。さあ／＼こひ／＼シテ畏て御座る 主是はいかな事。正敷太刀を持て来たが。いな事じやよ シテ何ぞ見へませぬか 主ふし義な事じや、太刀が見へぬハ シテはいかな事。頼ふだ人の最前某にお預けなされた太刀を忘れられたよ、致よふが御座る。「もうし／＼主何事じや シテ利根な蓼を好てまいる頼ふだ御方ハ物忘をなされて。愚鈍な名荷を好て下されますする太郎冠者ハ。失念致す

お太刀を預りて。是に持て居まする 主あの推参者めが。なんでも無事、あちへうせふ シテはあ 主まだ夫に居るか シテはあ

(13) 姫糊

シテ是ハ遙か遠国の者で御座る。先召仕ふ者を呼出し、悦バする事が御座る。太郎冠者居るかやい 太はあ シテ有るか 太はあ御前に シテ汝を呼出ハ別の事でもなひ。永々在京する所に。訴訟こと／＼く相叶ひ。其上御暇を下されて有るが、南^(マ)方目出度事でハなひか 太御意成るゝ通り、是ハ御目出度事で御座りまする シテ夫に付て明日ハ御宿老中へ御礼に廻らふと思ふに依て。内々汝に云付て置た小袖上下ハ出来て有るか 太兼て仰付られおくれましたに依て。由断なく申付まして御座るが。御小袖ハ出来ハ仕^(マ)まして只今にても御用に立まするが。御上下ハ未だ出来ませぬに依て。先程も紺^(マ)屋へ参り急がせまするが大方ハ出来まして御座るが。今少何やらんたらぬと申て出かしませぬ シテ夫ハ何がたらいで出来ぬぞ 太はあ。何やらんたらぬと申て御座るが シテ夫ハ何がたらぬ事じやな。紺^(マ)屋にたらぬ物ハ何ンであらふぞ。簇^(マ)絹張の様な物でハなひか 太いや左様な物でハ御座りませぬ シテすさりおれ 太はあ

シテおのれハ悪い奴の、常ニ物覚の無者なるに依て。何事も物によそへて覚といふ付るに、なぜに物によそへて覚ぬぞ 太内こ左様に御意成れまするに依て。此度も物に寄添て覚ましたれども失念致て御座る シテ何といふぞ、此度も物によそへて覚たれ共失念した 太中こ シテして夫ハ又何に寄添て覚たぞ 太常こ頼ふだ御方の御読成るゝ、物の本の内に有事で御座るシテ某がすひて読ハ源平盛衰記じや。其儀ならバ、荒増そらで読ふで聞せう程に。此内に有らバ有ると申せ 太畏て御座るシテ床机をおこせひ 太はあお床机 シテ扱も平家ハ寿永の頃都を落て。津の国播磨^(ママ)の境なる。一の谷を城郭に構へ籠り給ふ。東ハ生田の森、西ハ一の谷を木戸口として、某内三里^(マヤ)が間ハ福原須磨の板宿。兵庫明石高砂打続く。うしろにハ峨ことそびへし嶋越。前にハ蒼海漫漫ことして浪茂く、陸にハ赤旗立ならべ。さながら錦を張たるごとくに有しよな。此内にハ無か 太張ましたらバおこしませうが、いまだ張ませぬ シテ又寄せ手にハ亀井片岡伊勢駿河。武蔵坊弁慶にてハ無か 太いや／＼左様の色の黒い物でハ御座りませぬ シテ又爰に主ハ誰とも知らねども。年の此ハ四十斗^{ヨッヅ}に打見へ色白く。鬚黒く赤地の錦の直垂に。金作りの太刀を帯ビ鎧鹿毛^{カシカゲ}のたくましき馬に。遠鷹^{エンガン}の紋の打たる鞍を置き。乗たりしが。汀^{ナギサ}に付て落給ふ、然る所に武

蔵の国の住人。岡部の六弥太忠純と名乗り。真先掛て馳向ひ、馬の上にてむずと組ミ。両馬が間にどうど落す。上ニ成り下になり。半時斗も組合しが。六弥太さすが剛の者なれば、ゑいやつとはね返し、矢をひぎハにむずとのり。散髪^(乱)をかいつかみ。汝ハ何者ぞ、名のれ／＼といひけれ共終に名乗らず。六弥太せん方なく首かき切て見てあれば。箆に短尺付てあり。読て見れば旅宿の花といふ題にて、ゆき暮て此下影を宿とせバ。花や今宵の主ならまし。平ラの薩摩の守忠則と書て有り。太あゝ其忠則の事で御座ります シテ何ンじや忠則の事じや 太中こ シテ忠則ハ忠則、是ハ弓取の忠度、扱ハ汝が失念したるハ紺ン屋に遣ふ賤が姫糊の事であらふ 太夫こ姫糊の事で御座る シテ己が物覚のなき故、よしなき事に主に骨を折せおつた、なんでも無事あちへうせう 太はあ シテまだ夫におるか 太はあ

(14) 齊布施

是ハ此隣に住居致す出家で御座る。昨日約束仕った旦那の所へ。今日ハ早く参らふと存じたれ共、寝わすれておそなわつた、急で参らふと存る。去ながら独の旦那ハ齊に呼るゝ、今一人ハ布施斗を致さうと申されたるを、両方ながら約束致いたるが、どちへ参ッてよからふぞ。是ハ布施の方へも行たし、又齊にも

参度キ所なれば、熟々と思案いたすに。有情衣食住と聞時は、食に依て修すが様に有時ハ先食物が肝要じや程に斉へ行ふ。兎角其身が達者ニ有てこそなれ。誠に是は思案に及べぬ事じや。物を分別のなひとて種々の事を思たよ。しかれども、又爰に有る壇渡ハ是万行の初門、是に依て親疎を残さずと聞時ハ、又布施が肝要じや。殊に主の方より思ひ寄て申さるゝに、何角と云程鈍な事ハなひ、誰が聞ても能とハ思やるまい、早／＼布施の方へ参らふとハ思へども、但し一時の栄花に千年の命を延るといふ時ハ、又食事が肝要じや。先斉へ行ふか、併裸躰布破等ハ多んさいと聞時ハ、裸にてハ安からず、其上麻の衣紙の衾まふけ安うして、永生死の望少し、か様に聞時ハ布施が肝要、彼拾疋の布施を真中より押切ツて、五拾文ハ汁菜にあてがうて、塩を薪を買て座禅す、残り五拾文にて紙を買て襖を拵へ、達ま被に打かぶツて座禅工夫をするならば、坏か道にハ当たるまじきか、只布施へ行ふ、殊更使にてもいわれたるか、遠い所を自身わせたに行ねバ物知らずと思はりやうに、急で参らふ、参る程にはじや、物もう いや表に案内と有るが、どなたで御座る某で御座る 御坊様何とて今迄おそくハお出なされたぞ 愚僧も随分早ふ参らふと存じて御座れども、人が来るやら何角致して遅なりましたハ いや余り侍兼まして、去るお方を頼

まして、早お勤を致してもらひまして御座る、はて扱是ハお残り多存まする 夫ハ一段で御座る、愚僧ハ最早号参るぞ 先お茶でも参て御座りませ シテいや茶も給度フも御座らぬ、さうバ／＼ ト云テノキ、少腹 南わ／＼がはづを違たりともかなしうハなひぞ、是を思ふてこそ二所までうかがふだれ、少も苦無イぞいやい、先急で斉の所へ行ふ、いや是じや、物もふ案内もふ アド表に案内とあるが、物もふとハどなたで御座るぞ シテ愚僧で御座る アドいや御坊さまで御座るか。扱も／＼是ハまた遅お出なされた事かな、此ごとくに日がたけて御座るに依り、定てもはやお出成されまいと存て、俄に去方の御坊を頼まして早斉を遇て御座る シテ愚僧も随分とふ参らふと存て罷出て御座れども、路次で久しうあへぬ人に逢まして、何角咄を仕ておそなわりました御座る アド御尤で御座る、先少おはいりなされませひ シテいや最早かへりまするぞ アド先御茶でも参て御座れ シテいや茶も所望にハ御座らぬ。さらバ／＼。又爰もはづられたよ、去ながら日ハ何時ぞ。早四ッ過九ッ前じや。あゝ旦那の道理、愚僧が非が事。夫人ハ六道に迷と申すが。愚僧ハ四道に迷ふ。夫をいかにと申に。斉へ行ふか布施へ行ふかと思ふた所が畜生道。又旦那の斉を拵へて、とふこひかしす。よ／＼と今やおそしと侍所へ行ぬが餓鬼道。斉とも布施とも

思ハぬ所が人道。又旦那にも腹を立せ愚僧も腹を立。立てつ立させつしたる所が修羅道。なまじいに身にハ苅蓐^{ニシヤ}二駄の衣を着。罪障懺悔の袈裟を掛。十力の珠数を手にまとい。口にハ仏号を唱るといへ共。成仏徳説しせずして、無間の底にだんぶとおちやうずる事の、浅間しさわ候。あゝしなひたり。南無阿弥陀仏

(15) 狸売

主是ハ此隣の者で御座る。召仕ふ者を呼出し物を尋る事が御座る。太郎冠者居るかやい シテはあ 主有るか シテお前に主汝を呼出すハ別の事でもなひ。聞ケバ此比、汝ハ狸を取るといふがさうか シテいや左様の事ハ仕りませぬ 主いや／＼隠すな、しかと聞たに依て。狸汁を致いて振舞ふと、各こと堅く契約したほどに急で狸を出せ シテ是ハまた御意とも覚へませぬ、卒尔なお約束で御座る。私の取りましたらバ何しに隠しませぬ。先狸を御らふじられもなされひで。お振舞のお約束なされましたと御座るハ、余りな事で御座りまする 主腕^(定カ)と聞たに依ての事じやが、扱ハとらぬが定か シテ中々取ハ仕りませぬ 主夫ならバ汝ハ市へ出て狸を買てこひ、各こと約束をして置て遍返^(ママ)ハならぬ程に早ふ求てこい シテ畏て御座る 主急でも

どれ シテ畏て御座る。扱も／＼油断のならぬ事で御座る。某の狸を取ったとハ誰がいふておきやつたぞ、不思議な事で御座る。誠に隠す事ハ天知る地しる人知ると申が是で御座る。先急で市へ参て、某の狸ハ代なして参らふ。いや漸々参る程に、是が早市場じや。扱も／＼色々様このうり物があるハ。さらば某も爰元から売て見ゆ。狸うらふ／＼。南^(ママ)と何れも狸ハ御所望にハ御座らぬか。狸売ふ／＼ 主太郎冠者を市へ狸を買をやつて御座るが殊の外おそふ御座る程に、参て様子を見うと存るシテ狸売ふ／＼ 主是ハいかな事。扱も／＼悪事で御座る、某をバまんまとだまひて御座る。是ハ身どもの致やうが御座る。狸買ふ／＼ ^{シテウシロヲ見ル} 主目付テ シテ狸買ふ／＼、いやお前にハ何とて是へお出なされましたぞ 主余り汝がおそひに依て心元なさに見に來たが、何と狸を求たか シテ先程より尋まするが。今日ハ狸が無と見へまして御座りませぬ 主何と狸が無 シテ中々 主最前から聞に、汝ハ狸を買ふとハ尋いで、売ふと云あるくが。扱ハ某の前でハ取りませぬと方便た狸を売と云事じやな。シテいや左様でハ御座らぬ。今の程狸買ふ／＼と申てあるきましたが、間違へさせられた物で御座らふ 主扱ハしかとなひが定じやな シテ中々御座りませぬ 主夫ならバ是非に及バぬ事じや。去ながら市へ出てハ只帰らぬ物じやといふ。某上気晴に

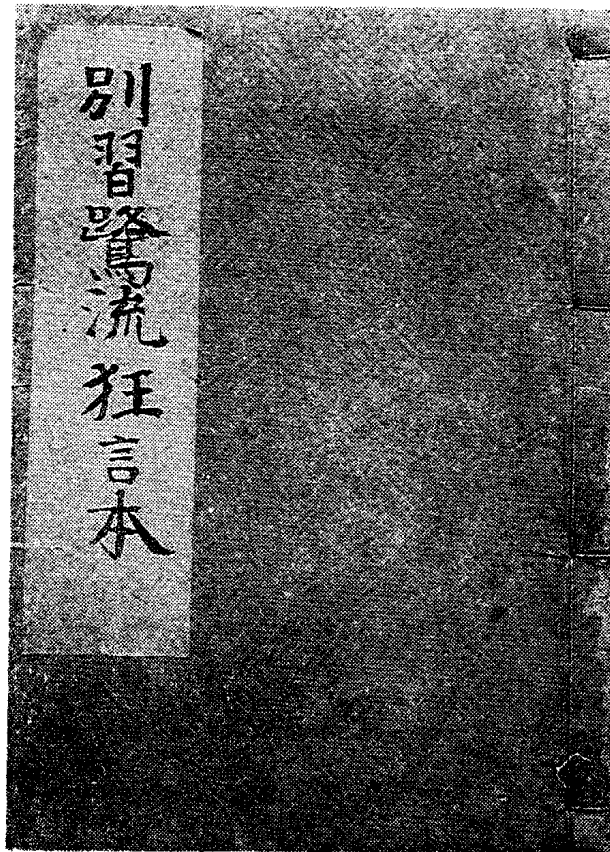
一ッ呑ふでもどらふ、酒を調へてこい シテ畏て御座る。去ながら此ものさわがしい市ノ中でハ、同じくハいらざる事で御座る。只おかへり成されて参りませひで 主いや／＼少も苦しい無事じや、急でこひ シテ畏て御座る。扱も／＼いらざる事をおしやる事なれども、是非に及ばぬ調へて参らふ。御酒を調へて参て御座る、上りませう 主さらばつけ。是ハよひ酒じやハシテ私の仕合で御座る 主今一ッつけ シテ畏て御座る 主扱も／＼心能事哉。やい肴に一ッ舞へ シテ御意でハ御座れども、か様の所でハ人がはらいませう程に御免されませひ 主市場の事なれば少しも苦しからぬ事じや。急で舞 シテ畏て御座る
(以下節付アリ)
 和番目出度かりける。時とかや 笛ニテ舞フ但 主やい／＼何とやら、今日の舞ハさんきやくでわるひ、順逆に廻らねバ舞ふとハいわぬ。急で今一度舞へ シテ畏て御座る 和歌喜に又よろこびを重ねつゝ 舞フ内ニ あれ御らふじらしい、薦が 主見ル内ニ其マ、廻リテ下ニ居ル 主なぜに廻らぬぞ。いそいでまわれ シテ只今の程廻りまして御座る 主おのれハ薦を教へて、夫を見る間に廻ツた、某ハ見ぬ、夫ならバ今度は某と連舞にまわふ シテいや御無用になされませひ 主いや／＼是非共舞ふ 和番主喜に シテ又よろこびを重けり 舞フ内ニ主シテノウシロヘマワリテミニトスル、シテハ見セストスル跡ヲシテマワル、主シテノウシロヲ見テ 主おのれはにくいやつ、狸を持ておつてあのおふちやく者めが、ど

ちへにぐるやるまいぞ／＼ シテ免るさせられい／＼

青野村

明治十九年一月

小杉守治(花押A)



『別習驚流狂言本』表紙

〔解 説〕

はじめに

『別習鷺流狂言本』は、前号で紹介した小杉忠三郎旧蔵、中村保雄氏現蔵の一群の仁右衛門系鷺流狂言伝書に含まれる本で、目録の一大型杉箱に収められる、いわゆる『賢茂小杉本』と同箱に収められていたものである。前稿に付して翻刻紹介する予定だったが、やや紙数が超過したので、本号にこれを載せ、あわせて鷺流の稀曲について考えておくことにする。

本書の所収曲は、他流においては普通に演じられるものもあり、稀曲集とはいえないという感じもするが、実は後に説くように、鷺流としては珍しい曲ばかりなのである。

一 書 誌

前号に略説したことをもとにして記す。縦二四〇ミリ、横一七二ミリ。薄浅葱色表紙。袋綴、綴糸白。表紙左に縦一七七ミリ、横四七ミリの白色縦長題簽を貼付し、「別習鷺流狂言本」と本文と別筆で記す。最終丁に「明治十九年一月 青野村 小杉守治(花押)」と記す。本文とは別筆。〈連雀〉に乱丁がある。改装があったようで、乱丁もその作業のときに発生したものか。賢茂小杉本四十冊とともに大型杉箱に収められているが、本書

だけ寸法が違っていて大きい。箱一杯の大ききで余裕がないので、本来は稀曲集成として別置されていたものであろう。成立筆者ともに不明だが、〈姫糊〉からは書体に変化が認められる。

二 珍敷狂言と稀曲

書上・名寄の類に載せられる曲名で、「珍敷狂言」という分類項目は「寛文以前書上」(伊達家旧蔵『御能組並狂言組』所収『四座家之狂言』)や『明暦三年鷺伝右衛門書上』(『萬聞書』所収)などに見えず、『享保九年狂言方四家書上』(『萬聞書』所収)から見えてくる。これは同書大蔵弥右衛門・同八右衛門書上のうち、「珍敷狂言」各五番(曲名は異なる)につけられた注、「右五番先年珍敷狂言御尋ニ付書上ケ申候。此外流義ニ無御座ニ候」という事情に基づくものだろう。

池田晃一氏「江戸初期の狂言界——演能記録よりみて」(『能研究と評論』昭52・8)は、この享保九年書上に見える「珍敷狂言」所属曲が「多く將軍綱吉・家宣期に上演されている」とを指摘し、「享保期、一流四派に共通する公認曲増設の問題は、元禄・宝永期、さらには享保期の活発な演能活動の面からも考察しなければならぬ」と述べられている。このことは、岩波講座能・狂言『狂言の世界』で指摘したように、狂言役者側の資料によっても確かめられる。すなわち、正徳二年(一七一二)秋、將軍家宣の命によって「珍敷狂言」が探索されていたとする享保保教本の注記である。このような探索の結果として新しく設けられたのが「珍敷狂言」という項目であった。

享保六年(一七二二)鷺仁右衛門書上(日本庶民文化史料集成3『能』所収)は「俄ニ難ニ相勤ニ分」として、次の十九曲をあげている。

氏むすび 歌仙 かくすい聾 若菜 花盗人 ちやかぎ座
当 鬼の宝 半銭 寝音曲 呼声 さいわう 若市 宝の
こぶ取 河原太郎 鐘の音 ぬし 路れん 人か杭か 鏡
男

享保九年(一七二四)鷺仁右衛門書上では、このうち、「鐘の音・路れん・鏡男」の三曲を「末」の部へ移し、残る十六曲を「珍敷狂言」の部に置いている。(曲名表記は「角水聾・茶かぎ・鬼の槌・西王」が改められている)

同じ享保九年鷺伝右衛門書上は、「珍敷狂言」と「右ノ書上ノ内ニ無レ之相勤来候分」の二種を載せる。はじめに「珍敷狂言」を引く。(曲名のみ、以下同じ)

相合ゑぼし 薬水 合柿 金藤左衛門 ござ座頭 唐人子
宝 かくし狸 引くゝり さどい セミ こがらかさ な
すび のつと神楽 若市 半銭 たこ (以上十六曲)
書上になくて演じていた分、

釣針 鞠座頭 寝替 鎌腹 水汲新発意 花論 早漆 鏡
男 人馬 勝栗 鐘音 (以上十一曲)

同じ鷺流でも、何を「珍敷狂言」とするかは異っていたことが知られる。わずかに共通なのは「若市」と鷺仁右衛門宗玄作として知られる「半銭」の二曲のみである。なお「ろれん」は末の部にあり、「鏡男・鐘の音」の二曲は書上外の上演曲とされている。

寛政七年(一七九五)仁右衛門書上(鴻山文庫)では「珍敷狂言之分」は三十曲に増加される。従来の十六曲に加えて、新たに「空腕・鶏流・箕被・鬼のまゝ子・松樫・児流鎗馬・業平餅・文荷・石神・合柿・相合烏帽子・栄螺・唐人子宝・釣針」の十四曲が導入されるのだが、このうち、「合柿・相合烏帽子・栄螺・唐人子宝」の四曲は、享保九年伝右衛門書上の「珍敷狂言」に含まれており、「釣針」は書上外に記されていたものである。

鴻山文庫本『天保九年三十流名寄書上』は仁右衛門・伝右衛門両家の書上が含まれているので、天保九年(一八三八)時の状態がよくわかる。

天保九年仁右衛門書上では、寛政七年の「珍敷狂言」三十曲をすべて含んだ上に「菊水祖父」を加えて「都合百八十六番」とし、次に「木六駄」をあげる。

同伝右衛門書上では、享保九年書上の「珍敷狂言」十六曲に書上外とされた曲を「珍敷狂言」に組込んでいるが、「寝替」を削除してかわりに仁右衛門家の「珍敷狂言」の「茶嗅座頭」を含む十一曲を加えて、その後「右百六十九番前之書上候外五番流儀ニ者無御座候得共御日合モ御座候ハ、相勤可申候」として、「張多古・昆布柿・人か杭敷・空腹・餌差十王」の五曲をあげている。

以上、鷺流の書上による「珍敷狂言」の増加ぶりを見てきた。大蔵流では、享保九年弥右衛門書上で「松ゆづりは・さいわふ・花盗人・樋の酒・まんぢう」の五曲、同八右衛門書上で「れんじやく・清水びしや門・ござ座頭・草平山伏・悪太川」の五

曲であったものが、天保九年弥右衛門書上では全く同一の五曲、同八右衛門書上では同じ五曲に加えて「角水・泣尼・鈍言草・射狸・木六駄」の五曲をあげている。弥右衛門家では全く増加せず、八右衛門家でも五曲を増加しての計十曲にとどまる。これにくらべて、鷺流では右と同時期の曲数でみても、仁右衛門家で十六曲から三十二曲へ、伝右衛門家で二十七曲から三十二曲へ(書上の外としてあげられたものも合算する)ということになる。池田晃一氏が前引論文で、「弥右衛門派とは対照的に、享保以降幕末近くまで曲数の増加に務める鷺流独自の体質」といわれるのも、もっともといえるべきであろう。

これらは表に出た「珍敷狂言」である。たとえ「書上之外」といい、あるいは「急ニ被_レ仰付_二而ハ難_レ勤御座候」といっても、書上に記載することによって、公称上演曲に位置づけられることになる。載せられたはじめは稀曲であっても、実質はそれほど「珍敷」とは意識されぬようになり、人数が多かったり、囃子が必要で、上演準備に手間どるものなどを「珍らしい」からすぐには上演できないとして、この部に収めておくことにもなったのであろう。

書上そのものではなく、書上と書上外の狂言を総覧した名寄の類には、真に稀曲というべき曲名もあげられている。手軽に見ることのできるのは、伝右衛門派の「惣狂言目録」である。

『萬聞書』所収のこれは、永井猛氏の解説によれば、宝暦名女川本の編成と一致する部分があり、「伝右衛門家所演曲を主体に、他家・他流の分や諸資料に見える狂言曲名を加えて編ん

だ」ものとされる。非上演曲と目されるものも含まれているが、宝暦頃に知られている曲名を総覧したという意味で面白い資料である。(1)から(11)まで計三百四十一曲を収めるが、後の方の(8)(9)(10)の雑、〈花子・釣狐〉や実体不明の曲名も収めた(11)に珍しい曲が多い。書上に準拠する形をとっていないので、比較しにくい。近世末のものとみられる名寄を引いて、稀曲と考えられるものをあわせ考えてみよう。

米沢図書館蔵『鷺流狂言頭付装束付』(国文学研究資料館の紙焼による)は米沢藩芸者方の一人と考えられる清水共明の書き留めたものだが、内容からみると伝右衛門派の名寄である。同図書館蔵の『狂言記』の一冊には「矢来清水氏」の印がある。表紙裏に「祠官清水彦介(印)」とあるのは所持者か。

頭付等は省略し、異体字等は通行の字体に直して「珍敷教言」以下を引く。「狂言書上之外」の部分について、「惣狂言目録」と共通の曲目には○印を付しておいた。

珍敷教言

相合烏帽子	薬水	合柿	金盗左衛門	替女坐頭	唐人子
宝 隠狸	引縊	栄螺 蟬	小傘	茄子	祝神楽
半銭 蛸	鞆座頭	水汲新発智大蔵	ニテ御茶ノ水ト云	釣針大蔵	
ニテ釣女ト云	鏡男	庵リノ梅	太鼓負 祇園囃子共	茶鼈座頭	

鳴子

右外

張蛸 寝音曲 鬼ノ槌 餌差十王 宝ノ癡取 カクスイ

聾 若菜 杭敷人歟 氏結 歌仙 早漆ヌリツケ共 蛭子大黒
 昆布柿 勝栗 遺子 人馬 石神フキトリ共云 吨サリキ共云
 鐘ノ音 花争 禁野 鎌腹 横座 空腕ナマクサ物共 鬼ノ
 継子 濟頼 以呂波 鶏流 芒々頭菊ノ花トモ
 狂言書上之外

二九。無縁聾。花盗人。西王。雁磔。松ヤニ。成上リ。ヤ
 セ松。樋ノ酒。満中。松護葉。北野詣。連雀。清水毘沙門
 芥川。草平山臥。御冷シ。水練聾。三人長者。弓矢。孫聾
 貫聾 猿聾 魚談儀。雪打。トチハクレ。六地藏。金岡
 酒搦坊。忠喜。柱杖。若和布。木実争。箕被。右流左止

岩橋聾。今明神。白地十王。馬口苦。蝸牛。附双六。柑子
 俵。木六駄。婦三盃。長刀応答。児流鑓馬。連歌十徳。保
 昌ノ種。瓢ノ神。ヒクズ。鶯聾。昆布布施。眉目能。鈍根
 草。太子鉢。青海苔。蛛盗人。継子山伏。浜名納豆。徳俵
 鰻頭喰。紺屋吨。鞍馬聾。六人僧。子祭福祭共。牛座頭
 受法。菊水祖父。野老。オサイ。東大名。銀借リ。狸腹鼓
 獅子。鳥説法。北野千句。万歳太郎。七福神。銀三郎。姫
 蘿。二人座頭。カクスイ。餓鬼十王。鬼論。児祖父。空腕

語之狂言

惠美須毘沙門 大黒連歌 鎧 牛馬 築紫奥 朝比奈 枕
 物狂 鱸包丁 文蔵 仁千石 遺子 濟頼 横座 箕被
 雁雁金 禁野
 右

以上が「狂言頭附」の後半部分である。「語之狂言」は別の分
 類を重複して立てたに過ぎないから稀曲ではない。天保九年伝
 右衛門書上とくらべると、書上外から組込んだ曲目に相異があ
 る。そして、「外」とする部が置かれて「珍敷狂言」から一部分
 移した曲も含めて二十九曲をあげ、その後に「狂言書上之外」
 として八十六曲をあげる。〈無縁聾〉と〈銀三郎〉のように、同一
 曲を別にあげてあるものもあり、これも掲出されるすべてが上
 演曲というわけではなかったろうが、数多くの稀曲名がここに
 あげられていることは確かである。

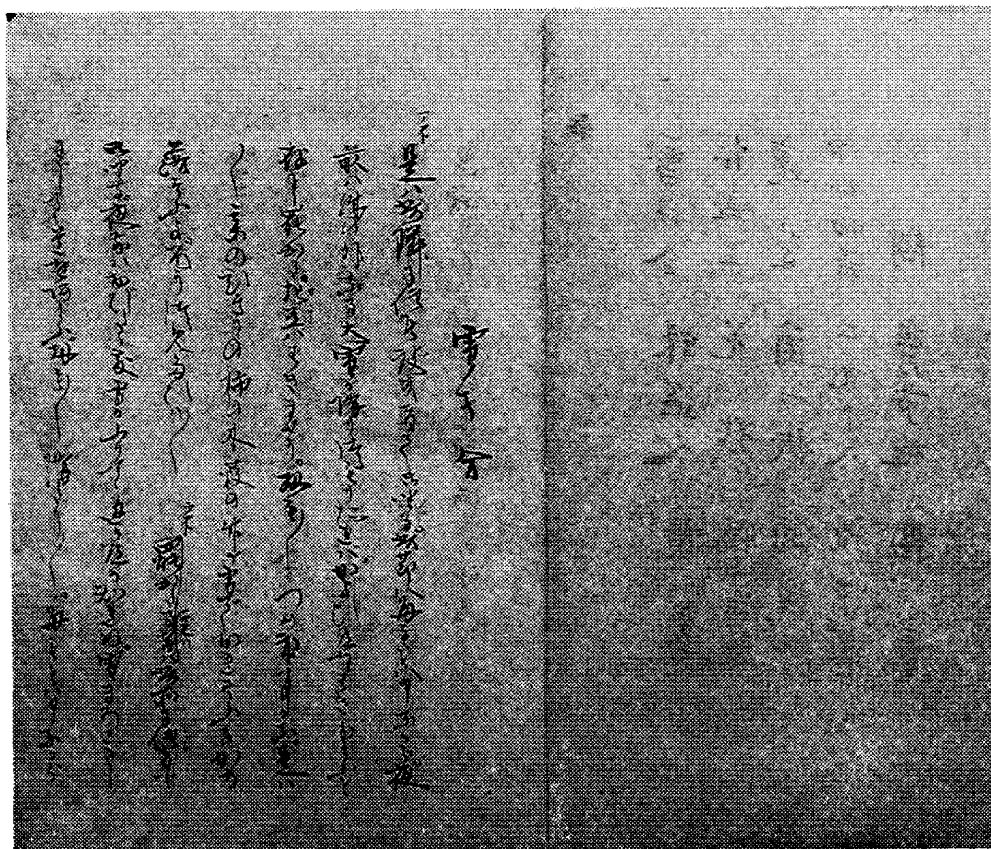
三 稀曲集

狂言の稀曲集として知られているものには、天理図書館蔵
 『狂言大外新』がある。これは大蔵八右衛門派のものだが、数多
 く他流の詞章も取り入れて成立した書らしい。『別習鷺流狂言
 本』とも、「雪打・蜘蛛盗人・鶯・花軍・連尺・婦参盃・二九十
 八・姫糊・どちはぐれ・隠狸」の十曲の曲名が共通している。
 大蔵流においてもこれらの曲が珍らしいものであったことが知
 られよう。

鷺流の稀曲集としては、『栗本実鑑集』巻二十が知られてい
 る。関屋俊彦氏「関西大学図書館蔵『杭全家狂言伝書』につい
 て 付関西大学図書館所蔵戦前能楽関係文献目録」(私家版、昭
 59・1)にその書名が見える。関屋氏の考証によれば、杭全氏は
 仁右衛門派の狂言役者で、伝書の中には寛政十二年(一八〇〇)
 の仁右衛門定賢発行の免状も含まれている。文書に記される年

号の上限は安永四年(一七七五)、下限は文政六年(一八二三)と
 のことで、江戸後期の伝書と見られる。『栗本実鑑集』そのも
 のは、関屋氏が注されるように、安永森(藤左衛門)本にその書
 名が見えるので、安永以前の成立のようだが、この巻二十は、
 杭全家本においても、この巻だけ存在しており、その中に八月見
 座頭が収められている所からみて、遅れて成立したのかも知れ
 ない。杭全家本の他の本狂言がすべて、一曲ずつの稽古本の形
 なのに、これは四十一丁ある一書の形をしていることも、他書
 とは異なる伝来を持っていたことを示している。中には鬼
 比丘尼のような珍曲も含まれるが、それらの詞章はいずれ関
 屋氏によって紹介されると思うので、ここでは簡略な書誌と目
 録を記しておく。

書名「栗本実鑑集」、表紙楮紙、仮綴。二四・九×一七・四セ
 ンチ。表紙に「栗本実鑑集 二十」と記し、内題に「栗本実鑑
 集巻二拾」と記す。目録は「習雑」として、「若和布・万歳太
 郎・深草祭・月見座頭・鬼比丘尼・二人座頭・猪狸・祇園詣・
 松山鏡・ホウ／＼頭(坊々首)・伊勢物語」の十一曲を収める。
 『別習鷺流狂言本』とは「万歳太郎・伊勢物語」の二曲が共通
 するので、それは後にくわしく考えてみよう。この巻二十が「習
 雑」とされているところは、「別習」と共通していて面白い。
 その流儀に保持されていなかった曲を「習」として導入したと
 見られるからである。



本文冒頭へ雪打合

四 各曲解説

以下『別習鷺流狂言本』所収の各曲について略説するが、そのはじめに池田広司氏『古狂言台本の発達に關しての書誌的研究』付録「狂言曲目所在一覽表」を利用して、台本の有無を確認しておく。次表がそれである。

この表の鷺流欄には、古く活字化されたことのあるものも注した。補遺とするものは国民文庫『狂言全集』の付載の「狂言記補遺」で、明治三十九年に雑誌『能楽』に長谷川福平校訂として載せられたものである。「五十」は芳賀矢一編『狂言五十番』で補遺と同本、ただし『伊勢物語』はあらたに増補されたものである。これらは『別習鷺流狂言本』と同系で、非常に近い本と考えられる。その他の本については、各曲略説において触れる。「ナシ」とするのはその流派の台本が管見に入らぬものである。『狂言大外新』は除外してある。

曲名	鷺流	大蔵流	和泉流	狂言記
(1) 雪打合	補遺・五十	ナシ	天理以下	ナシ
(2) 蜘蛛盗人	補遺・五十	虎明・茂山	波形・集成	ナシ
(3) 指鷺	保教・賢通	ナシ	天理以下	記続1
(4) 松雛子	栗本	ナシ	波形・集成	ナシ
(5) 花戦	補遺	虎明・茂山	天理・波形以下	ナシ
(6) 昆布布施	ナシ	ナシ	ナシ	記続3
(7) 連雀	ナシ	虎明・虎光	天理以下	記外3

(8) 菌山伏	名女川	虎明・山本・茂山	天理以下	記外1
(9) 酒盃拝	保教・野中	ナシ	天理以下	記拾4
(10) 伊勢物語	五十・栗本	ナシ	ナシ	ナシ
(11) 二九十八	有江	虎明・山本・茂山	天理以下	記外5
(12) 鈍根草	ナシ	虎清・虎明・虎光	天理以下	記3
(13) 姫糊	保教・集成	ナシ	ナシ	記1
(14) 齊布施	保教	虎明	天理以下	記続4
(15) 狸壳	山口鷺流	ナシ	波形以下	記外4

以上が略表である。鷺流における稀曲が大蔵流においても稀曲となつてゐることがこの範囲でも確認される。虎明本のみにあつて、その後の諸本に収められない曲を含めれば、その傾向は、より強くなる。「蜘蛛盗人・花戦・菌山伏は明治三年になつてから」「蜘蛛盗人・菓争・菌」という曲名であらたに組入れられた曲である。それに反して、和泉流ではこのほとんどが通常のレパートリーのうちの曲であつた。狂言記系とも共通するものが多い。大まかな傾向としては、『別習鷺流狂言本』(以下別習とする)は和泉流(京流)や群小諸流(南都禰宜流など)の保持してゐた狂言の影響下に成立してゐるといふてよいであらう。

以下、各曲について略説する。

(1) 雪打合

諸本の状況から見ると、これは和泉流の狂言であつたらしい。天理本に「雪打合」として見え、和泉家古本以下は「雪打」と称す

る。天理本から狂言集成まで、和泉流の筋立ては基本的には共通で、門前の子が大雪の朝、雪を掃いていると、隣の門前の者が、自分の方へ掃きよこすなとがめ、争いになる。寺の住持が出て仲裁するが子にひいきし、結局、子と男の雪打(雪合戦)となる。女が登場し、住持との仲を明かして、三人で男に雪を打つのである。天理本から波形本までは、門前の者が子の母と住持の仲を暴露する場面があり、また結末は、子が門前の者を追込み、そのあとで「女房坊主をおうて入ル也」(天理本)、「手を引て入、タツシヤナラバシテヲ負テモ入ベシ」(波形本)というのが古い演出で、集成は、女と住持の仲をはじめに暴露することはなく、結末も三人が入るのを男が追込むことになる。

驚流の本は三種ともほとんど同文である(ただし、「補遺」と五十にはト書・演出注はない)。別習では「一ノアドの名乗が、もと「罷出たる者ハ」になっていて、それを「是ハ」と訂正しているが、「補遺」等は「罷出たる者は」のままになっていることが異なる部分である。和泉流とは僧の身分が異なり、斎に行く貧僧ということになり、従ってアドも門前の者ではなくなる。女と僧の間は、はじめにほめかされるだけで、結末は男が捨てゼリフを言いながら三人に追われて入ることになる。結びの演出は和泉流と全く異なるが、男が女と僧の仲に言及することなどは集成より古い段階を受けていると考えられよう。それをあまり露骨でなく演出するのは集成に似る。雪国の生活を描写する風情や雪合戦の面白さは捨て難いものであろう。和泉流でも上演されていないのは残念なところである。

(2) 蜘蛛盗人

大蔵流では、虎明本に「盗人蜘蛛」として、あら筋的な台本を載せ、明治に組入れられるまで、「大外新」を除いてレパートリーになっていない。虎明本の演出注に、クモの巣にかかるところを、「かべに、ひらぐものごとくにして」にし、別に、「ぶたいにては、大じんばしらにいだきつきてゐる」とあるので、本演出は座敷狂言としてのものが記録されていることになる。和泉流は、天理本・和泉家古本ともに収めず、波形本に見える。波形本は、連歌の当にあたった貧乏人が盗みに行き、前裁で見つかる。「蜘蛛の家に」の古歌を詠み、次いで「蜘蛛の家ニ懸るやさしき盗人ハ」「切るも切られずさゝがにの糸」の付合をして許され、酒を振舞われて小袖を与えられ、「夫一生や誠や／＼」の和歌をあげて、「又蜘蛛の巣にかゝらうとした」と留める。集成本は大きく設定が違い、連歌会を立聞きしようと貧乏人が庭に忍びこみ、客人大勢にとらえられて「蜘蛛の家に」の古歌を詠む。「蜘蛛の巣にかゝるやさしき忍びづま」「きるにきられぬさゝがにの糸」の付合で許されて仲間に入れられ、酒を振舞われ、小袖を与えられて和歌をあげて帰る。謡の詞章は、他とは大きく異なり、「実に誠や実正や、盗人に負といふ心を今こそ知られたれ。連歌にすける優しさに……」となる。集成本は大きなクモの巣の作り物にふさわしく、登場人物も多く設定されており、大きく演出が変えられたものと見える。驚流の台本は、キリの謡の詞章も波形本に近く、集成本に遠い。波形本には土蜘蛛

蛛」と同じ作物の図があり、虎明本の演出より見た目が華やかになっていたことが確かめられる。別習の注には、「大臣柱ノ方ニテ蛛ノスニ掛リタル体ニシテ居ル」とあるので、作物を用いるようにはなっていなかったと思われる。その点では古い素朴な演出を残しているといえよう。

(3) 指鶯

和泉流の諸本と続狂言記に見える。享保保教本には「鶯刺」として詞章を載せるが、そのはじめの注記に、「鶯大倉ニハ無之、白楽天ノ有之時杯脇狂言ニモ吉」と記している。台本の存在状況ともこの注記は一致している。鶯流では他に賢通本にも見える。賢通本は辺りの者が鶯を鳴かせている所へ侍が来て刺そうとする。理由は稚児に鶯を頼まれたためで、その場で酒を振舞い、刀を懸け物にして鶯を一回刺そうとして失敗し、「初春の」の歌を詠む。男の返歌は、「鶯もこの一腰もさしかねて腰に竿をやさして去ぬらん」で、また争いとなり、侍が鶯を取って逃げ、男が追い込む。別習の発端に鶯を手に入れる和歌の贈答が描かれるが、賢通本にはない。賢通本は侍のセリフが「花月」の文句を引いたりして詳しいが、別習は簡略である。一見した所では別種の台本かと思われる程異なっているが、そのあとの進行の中で共通のセリフが相当にある。同じ祖本から出て、それぞれ別の工夫を加えられたものと見てよいであろう。

各時代の台本のある和泉流は、天理本以降ほとんど同じ筋立てで、梅若殿という少人に鶯を頼まれた侍が、太刀・刀を懸け

て鶯を刺そうとして失敗し、古今注に見える「大和の国高天寺に梅若殿と申す少人」の語りをし、「初春の太刀も刀も鶯もささでぞ帰るものとすみかに」の和歌を詠んで帰ることになる。続狂言記は少人の名前は云わないが同様の進行をし、語りがなくて和歌を詠むが、帰られてしまい追込みとなる。

保教本の詞章は、続狂言記に近い。留めは「シナイタルナリカナ」とするが、別に追込みの留めを記し、これも続狂言記に近い。賢通本・別習は保教本とは関係なく、別に工夫されたものであろう。

(4) 松囃子

和泉流波形本・集成本、鶯流栗本実鑑集(以下栗本とする)に見える、大蔵流に見えない。別習には「万歳太郎とも」とあり、栗本は曲名が「万歳太郎」で「亦一名松囃子共云」と注している。本文は栗本の方が簡略で、太郎が登場して道行をする所でも、「年取俵物」の事を云わないので、あとの展開がやや唐突に感じられる。別習で太郎に対して兄弟が丁寧な表現を用いていることが目につく。和泉流は諸本間のゆれが少い。別習は直接に和泉流を受け、栗本はより離れているといえよう。

(5) 花戦

『萬聞書』の「鶯大倉京流名替」に「木実論花いくさ 花合戦」と見えるので、「木実争(菓争)」と同曲と見られていたことになる。「木実論」は天理本・虎明本等から見え、いずれも、橘の精と茄

子の精が登場して、歌の言葉からの争いとなり、木の実同士の場合になって、大風に吹かれて終るといふ筋立ては共通である。天理本の末尾に「此狂言ハ昔より六義はなきなり」と言いながら抜書に詳しく詞章を載せるのは、和泉家古本抜書の注に「此狂言花軍ノ間也」とするよう、もと間狂言として用いられていたからであろう。「能間・作物作法」のへはなくさにも「あひ、このみのせいにして四五人名のりて出ル。ワキ座ニ立っている。さて一セイにて、またあひ四五人出る。キリのうたひあり。」とし、虎明本「萬集類」にも、「花車間ハこのミのあらそひへノ狂言なり」と見えている。

近年復曲の茂山家（葉争）は独立の狂言として演じられたが、これらと別習・補遺との決定的な違いは、登場する花実である。《花戦》の名の通り、はじめ桜たちと桃花が登場して争いになる。《木実論》が橘や茄子など実物がはじめから登場するのは違うのである。もっとも後半になると桃方には梨・梅が参加し、キリの謡も「桃実」と言っている、花方と実方の争いになっている。この事から考えると、《花戦》は《木実論》から作られたものと言ってよさそうである。

(6) 昆布布施

『惣狂言目録』『鷺流狂言頭付装束付』に曲名が見えるが、台本を見ることは少ない。『能楽』大正元年十二月号所載「狂言評釈」に本文が引かれるが、これは続狂言記の本文によったものである。野村又三郎家に《布施昆布》があるという。

別習と続狂言記の大きな違いは、続狂言記では住持（長老）も俄出家の夫婦と一緒に布施を貰いに行くのに、別習では夫婦だけが行くことである。この結果、続狂言記では夫婦で長老を打ちこかし、長老が追込むのに対し、別習は施主の男を追込むようになっていいる。また布施は、続狂言記は出家五巻、比丘尼三巻といい、別習は出家尼とも十巻とある。どちらの本も、年の暮を過しかねた庶民の姿がよく描かれている。

(7) 連雀

和泉流には天理本以下の諸本があり、大蔵流でも虎明本・虎光本にあり、狂言記外五十番にも見える。鷺流における稀曲ということになる。

虎明本は狂言記外とほとんど共通で、酒売の女と連尺売の男が一の店を争い、腕押・脛押・相撲の勝負をし、結局女が勝つことになる。和泉流は天理本から集成本まで同じ筋立てで、餅売の女と絹布売の男が一の店を争い、脛押・相撲の勝負をし、女が勝つ。脛押での勝負の仕方といい、相撲のあとで女が倒れている男の上で着物を振り、男が鼻をつまんで入るといふのは、相当下がかった演出である。男が絹布売りなので「連雀（尺）」という題名は、虎明本等の「連尺を負ふて歩く」行商人ほどに内容にふさわしいものになっていない。

別習は酒売女と連雀売が争い、相撲を取るだけなので、狂言記外の系列によって書かれたものと考えられる。女とあなどって連雀売が高言を吐き、強いとは見えなかった女に逆転される。

女狂言としてすっかりした仕上げになっているといえよう。

(8) 菌山伏

和泉流は諸本あり、大蔵流は虎明本と明治の組入れ、鷺流は宝暦名女川本にも見える。これも狂言記外五十番に見える。

虎明本と狂言記は同系で、天理本以下の和泉流も同種である。これらは、男が庭に生えた茸を祈ってもらいに山伏の所へ行く。山伏は「葵上」の「九識の窓の前」で登場、男の家へ行って祈るが茸はどんどん出て、留めとなる。留めの仕方はシャギリ、追込などの揺れがある。宝暦名女川本の「菌」も同系である。従って別習の詞章は他には見られぬ独自なものである。①主が太郎冠者を「山の法印」の所へ行かせて頼む。②はじめに目出度い事だという。③法印も目出たいというが、「弥繁昌致す様に一加持」することになる。④祈った結果はあまり明確ではないが「そく座にうせけり」とある所からみると、祈り消したようでもあり、これは「目出度い」とするにふさわしくない。⑤キリはお茶を飲んで御礼を貰って帰ることになるが、これも他にはない演出である。山の法印へ使を出すという設定、キリの謡も「葵上」の、「あらあら恐ろしの般若声や。これまでぞ怨霊この後またも来るまじ。読誦の声を聞く時は、悪鬼心を和らげ、忍辱慈悲の姿にて、(中略)成仏得脱の、身となり行くぞ有難き」のパロディである点から見て、山伏登場の段に見られる「葵上」意識をキリまで拡大して改作されたものといえよう。

(9) 酒盃拝

和泉流に諸本あり、曲名は「茶子味梅」、天理本・和泉家古本はほとんど同じで、唐人(名はいわない)と三年添った女が物知り「日本人無心我唐妻子恋」と「さすあんばい・きすあんばい」の意を尋ね、「日のもとの人の心のなかりしにわがもろこしのつまぞこいしき」と「茶を飲みたい・酒を飲みたい」という意だと知り、戻って夫と争い、女が追込むという筋である。波形本になると筋立てが大きく変り、女は腹を立てたが酒を用意し、酒盛りとなって、女が舞い、唐人が茶を舞ってからまた嘆いて追込まれる。天理本等の舞のない演出は後の演出注に残されているが、本演出としてはもう変っており、集成本に続くべき新しい演出になっていたのだろう。このような変化は狂言記拾遺に見られるような演出が影響しているのだろう。

保教本は「茶子塩梅」の曲名で、「鷺方ニハ無之、外ノ流ニハ何ノ方ニモ有之、其内大蔵ニハ無之モ同前、百六拾番ノ外ナリロ伝」と注する。これによれば、大蔵流にも番外曲として存在したことになる。保教本の楽の部分の注に、「立テ大小ノ前へ行、楽ヲ舞、大蔵ニハワカ有、南都流杯ハ直ニ唐相撲ノ通ニ笛吹出シ、ワカナシニ楽ニカ、ル」という。また、「大倉ニハ楽過直ニ乍立独言云如前之嗟。京流ニハ楽過下ニ居思ヒ出シ独言云嗟、此仕様能ナリ」と記す。大蔵流も和泉流も楽を舞っていたことになる。和泉流では、和泉家古本まではこの形の楽はないので、ここに記されているのは波形本的演出ということになる。波形

本そのものは保教本より後だが、その演出は元禄・享保ごろは存在していたことになろう。

狂言記拾遺は「茶盃」で、唐人の唱えるのは「日本人無心自我唐国妻恋」その和らげが、「日本の人の心のなかりせば我からこくのつまぞ恋しき」、唐人は一声で登場し、「唐の東カッノ西日本地に集めるなり」と謡い、「是ハもろこし茶盃」と申者でござる、我十ヶ年以前日本へとられ箱崎の浦に住居せり」として、日本人をいう。このあたり、保教本もほとんど同じで直接関係があることが想定される。保教本の「日本人無心人我到国妻憐」は相当に当て字のようで、驚流に無い曲を耳で聞き取って書き留めたということになるだろうから、保教はそのような舞台から記録したのであろう。池田広司氏の『古狂言台本研究』の結論、「刪定或いは固定せる大蔵流を多分に反映した台本によった」という事を参照して、前引の大蔵流番外という注と拾遺には楽の前のワカがあることを考えあわせれば、その舞台は大蔵流の傘下に入った群小流派のものであったと思われる。伝右衛門派の野中本は保教本の系列である。

別習は広くいえば拾遺の系列だが、本文は集成本に近い。

(10) 伊勢物語

はじめ芳賀矢一校訂『狂言記選狂言二十番』（富山房、明36）に引かれ、雑誌『能楽』明45・3の「狂言評釈」、次いで大正15年の『狂言五十番』に引かれる。すべて同本で、別習と同系である。

栗本は、全体の筋立ては別習と一致するが、セリフの細部には異なる所が多い。以下、進行を追って、特に注目すべき相違点を引こう。「罷出タル者ハ」の名乗で登場した西国の者（シテ）は、道行して近江の湖にかかり、「近江八景ト申モ此辺リヲ中ケニゴザル」と云い、瀬田ノ長橋を見て、「櫛ノ板苔ムス計成ニケリ幾世ヘヌ覧瀬多ノ長橋」の歌を引き、安野ノ郡へ着いて御堂で寝る。田舎人が「此辺リニ住居致す者」と名乗って登場し、「志ノ日」の事をしてから「畑ケエ見廻フ」と出て、斎夢坊たちを見付け、「兩人共ニヲドロカシテクレウ」と起こす。兩人の魂が入換ってからのセリフは相当に違う。例えば、日向の者がうろたえたと言われて怒る所のやりとりもない。ここは別習の方が細かい。もう一度寝よと云われて、シテは「唯今ゲン俗致テハ寺ニ居ラレマセス難義ニ成増程ニ兎角頼マスル」と云い、日向の者は「某モ妻子ガゴザレバ唯今発心致テハ何共成マセヌ本ノ様ニ仕テ呉サシマセ」と云う。これは別習にない。再び寝入り、慎重に起こされてもとに戻り、最前の様子を話されて、日向は「扱ハ存当リマシタ夢ニ出家致シタト見マシタ」と云い、シテは「某ハ夢ニゲン俗致タ見テゴザル」と云う。別習の「是ハ夢にも存ぜぬ」とは違っている。別れに田舎が「下向ニハ必ミ寄ラレマセ此辺デ誰ト申者デゴザル余リ不思議ナ縁デゴザル」と云う所も別習にはない。キリのイロ詞に入って、「出家詞ハ余リ急デ国元ノ土産ヲ失レ玉フナ」との注記がある。キリの謡の末は「日向ノ国エ帰ラン／＼、三人サラバ／＼」である。能「歌占」や古作の「雲林院」に見える「伊勢や日向のこと」（伊勢

物語の書名起源説話で、知頭集に見えるそれは古典大系『謡曲集』上補注87に略説される)にもとづいて、魂が入換わることを作ったものである。これを昼寝という卑近な素材に用いて、曲名を「伊勢物語」という優雅なものとしたこと、曲中の古歌の引き方など、なかなか教養のある者の作と思われる。なお「狂言評釈」は「伊勢や日向」についても触れず、単なる本文紹介に終っている。

(11) 二九十八

和泉流天理本以下諸本あり、大蔵流は虎明本と江戸末期組入れのもの。狂言記外五十番にも見える。鷺流では寛政有江本にあるが、別習と比較すると、他のすべての諸本と異なる共通の特徴がシテの登場部分に認められるが、同文という訳ではない。有江本の冒頭を引けば、「是ハ此傍の者で御座ル、世間の有さまをつく／＼と見るに、侍ハ馬をのり兵法をつかい、又農人ハ田畠を耕して一期を送り、商人ハ未明より暮迄て毎日／＼売まする、細工人ハ手隙もなくいとなミをする、土農工商ともに渡世のいとなミで御座ルが、我等ハ若い時より何成共是そと思ふいとなミをも致さず、一日／＼とくらいて居まするに仍て、手前ハ貧う御座り、せめて今からなりとも何ぞ心懸を致たいと存て、此中ハ少算用を致する」と云い、妻乞いに行くのである。他の諸本が虎明本の「ならの者」を除いて、「この辺りの者」で簡単な名乗りしかしないのにくらべて、個性がある。別習はことに趣味的な風流人として造形されている。男が謎を解いて女の所

に着くと、大蔵流はそのまま女の家で酒になる。和泉流天理本・和泉家古本と狂言記外は男が女を背負い、波形本以後は手を引いて男の家に戻る。鷺流は、有江本によれば「ガクヤへ行テツレテ出ル」とあり、背負ってくるのではない。新しい段階を反映しているのである。

(12) 鈍言草

和泉流は天理本以下諸本あり、大蔵流は虎清本・虎明本・虎光本に見え、狂言記にもある。鷺流としての稀曲である。和泉流・大蔵流・狂言記ともに、それほど変った理由でもなく鞍馬参詣をするのだが、別習は一夜の内に松の木が生えるという夢を瑞相として参詣する。鈍根草・利根草の語りは、大蔵流・狂言記は主の語り、和泉流は太郎冠者の語りになっているが、別習は主の語りになっている。それでいて別習は、はじめに太郎冠者に丁固の松の故事を語らせ、シテの仕事をふやしている。

(13) 姫糊

これは和泉流・大蔵流に見られず、鷺流で保教本へ絹粥・集成本(この両者はよく似る)、賢茂小杉本と別習(これはほとんど同文である)、狂言記へひめのり／＼に見える。北川忠彦氏『文蔵』・『青海苔』・語り(『観世』昭62・4)はこの(姫糊)も視野にいれて論じられているが、そこで云われている通り、狂言記の語りの冒頭は保教本に似るが途中から離れる。別習は保教本との直接関係はないと思われ、語りの後半はかえって狂言記に

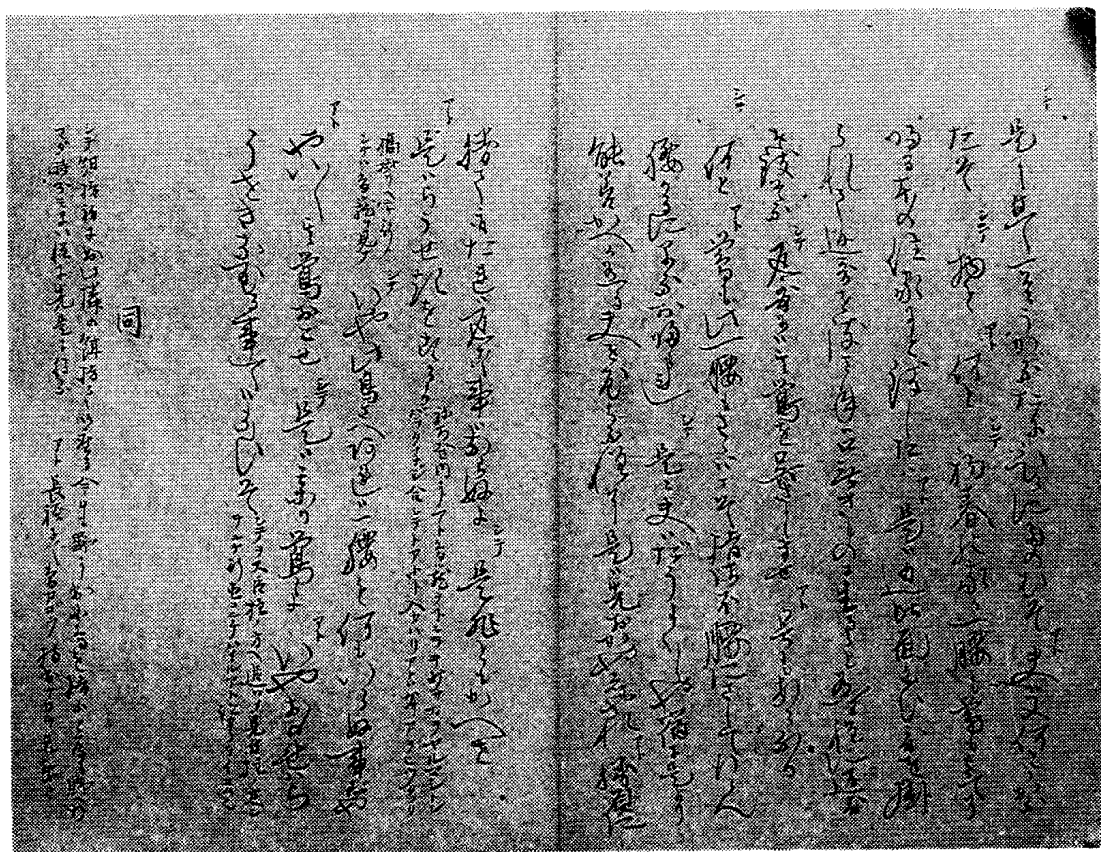
近い。それぞれが狂言記をもととして工夫を加えたと思われる。保教本(文蔵)の注記に、「文蔵 青苔 網粥^{ヒメノリ}ケ様之類ハ間杯又外ノ狂言トハ替リ読物ナル故書物ハ色々有レ之間昔ヨリノ記録ナドニ相違アリテモ不^レ苦」という態度が存在しての工夫であった。

(14) 齊布施

「どちはぐれ」の曲名で和泉流諸本(古典文庫本「十方迷」・集成本「東西離」を当てる)に見え、大蔵流虎明本は目次では「東西迷」と書く。続狂言記も仮名、保教本は「共恵迹」である。保教本は布施の主と斎の主と僧の三人の演出と、僧一人で演じる演出とが併記される。和泉流は斎主と布施主とが登場する三人立てなので、前者の演出の類例となる。虎明本と続狂言記は一人狂言で後の演出とかかわる。別習は一人狂言の形式で始まるが、斎主と布施主の家に着くと、それぞれが出て僧に應對する。相当に一人狂言に近い演出である。「寝わすれておそなわった」という所は珍しい。保教本注記に、「此狂言ハ出来カヌル故遠シ、口伝色々有、大場ニテハ用ズ、座敷杯見物ノ近所キニテハ能狂言ナリ」とする。和泉流では相当に露骨なやりとりがあるが、一人狂言になると迷う姿が中心となり、落着いた狂言となる。

(15) 狸売

〈隠狸〉の曲名で和泉流波形本以降の諸本と狂言記外五十番に



本文例(指鷺)

見える。古典文庫本の注記に、「此狂言ハ追加ノウチニテ古書ニハ不^レ見、新キ狂言ニテ狂言ノ意味浅シ」と云う。和泉流は主が酒を用意して市へ行き、酒になってから、太郎冠者が狸の釣り方を述べる。最後、波形本・古典文庫本は主に取られた狸を太郎冠者が取返して追込まれる。狂言記外と別習は共通してこれらの部分が異なり、酒は市でととのえる。留めは太郎冠者が持っている狸を見あらわされて追込まれる。記外は冒頭に特色があり、主が「そちはよい犬をもって狸をさいく」とるといふ」

という。このあたり、別習はおだやかだが、全体としては狂言記外の影響下にあると云ってよいだろう。

以上、各曲を見て来たが、それぞれ特徴があり、ひとしなみにその傾向を述べるわけにはいかない。虎明本に記載されていることを除けば、鷺流の稀曲は大蔵流においても稀曲であった。和泉流では稀曲ではなく普通の狂言とみるべきものが多く、狂言記系諸本とも共通する曲名が多い。京流・南都彌宜流に代表される群小諸流の狂言が別習の源泉となっているのである。